

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可 昭和廿九年三月一日発行廿九年三月号 (毎月一回一日発行) 創刊大正十三年・通刊四四二号

証の雅集

Pensoj flugas trans la land - limon THE SENRYU ZASSHI

No 442

麻生路郎☆主宰

三月号



川柳雑誌社主催

本社三月句会

—4月本社句会予告—

度	人	よ	仮
兼題	柄	目	縫
胸			い

暖かい会場で楽しく作句をいたしましょう。
最近には特に新人の方がふえました。

日時 三月六日（金）午後六時

会場 自安寺（〒211）一四七八番）
大阪市南区千日前電停スグ北側

兼題「花 簀」（三句） 清水白柳選

「むだ骨」（三句） 金井文秋選

「煙 突」（三句） 真鍋一瓢選

「くしやみ」（三句） 本多柳志選

席題 三題（当日発表）

柳話 川村好郎

呈賞 ☆各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞

会費 百円

幹事 紫香・いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・

与呂志・清人・水洞・すゝむ・薫風子・柳

宏子・舟遊

★投句だけの方は郵券三十円同封

（〆切三月三日）

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪 六〇八一



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰（化粧ケース入）一、八リットル詰・一、二〇〇円

清酒

日本盛

ニホンサカリ

灘西宮酒造 醸



不朽洞句帖

麻 生 路 郎



翠爪に祖母の育ちをおもわされ

日日好日なんて 父の負けおしめ

A少年 父の愛人と共鳴す

鉄筋の骨組み猫も寒う見る

老人の眼の前を転がりゆく紙屑

一九六四・二月

川柳雑誌★三月号目次

題字：麻生路郎・表紙：野尻弘

不朽洞句帖……………麻生路郎…(3)

川柳名句抄の鑑賞……………麻生路郎…(4)

手前勝手な柳論……………東野大八…(18)

明治大正柳誌順礼……………奥津啓一朗…(13)

川柳初編研究(一二)

丸十府・岡田甫

川端柳風・高須咄三味・前田喜代人…(14)

大野風柳の人と作品を語る……………藤井比呂夢…(24)

短評……………清水白柳…(12)

二句の優劣を聴く……………諸家…(32)

★続・川柳書架……………(19) ★現代柳人録……………(20)

金に繋がる話……………麻生路郎…(28)

柳誌寸言……………本多柳志…(37)

秋色女……………富士野鞍馬…(27)

大万川柳「波の音」発表……………(40)

★

川柳塔……………麻生路郎選…(6)

同舟近詠……………諸家…(35)

近作柳檣……………麻生路郎選…(20)

金泥集……………北川春巢選…(26)

各地柳壇……………麻生霞乃選…(42)

入門講座……………清水白柳…(30)

★柳界展望……………(38) 新聞と時事吟……………不死鳥…(26)

一路集「金策」……………尼緑之助選…(36)

「サンブル」……………小西無鬼選…(37)

……………吉田圭井堂選…(46)

★柳構室……………路郎生…(46)



川柳

名句抄の鑑賞

麻生路郎

汲取りの不平拜啓市長様

〔一〕

庶民にとって汲取り問題ぐらい深刻なものはない筈だが、斯うした表現で突きつけられて見ると、何となくユーモラスな感じの方が先きに來て、肝心な深刻味が迫って來ない。

(三司)

「おばちゃん。この辺に、何ぞおもしろいところないか」

「へへへ。旦那さん、おもしろいところ」

「そやなア。土産話になるようなところや」「みなさん、よく聞かれますが、裸おどりのことですか」

「ソヤソヤ、それ、どこや」と、言うところか。

この句は拜啓天皇陛下様や拜啓總理大臣様と同じ型を踏んだ文句取り式の句で、奇智を狙った点が余りにも強く出ているために、内容の深刻さの方が浮かびあがって來ないのだと思う。しかし面白い句には違いない。

〔二〕

貸浴衣何ぞおもしろいとこないか

(喜山)

老人が墨をすっているので、

「きようは揮毫ですか」

と、言ったら、

「そう見えるかね。きようはコレだよ」

〔三〕

墨すって書くのではないやいとの日

(圭井堂)

と、老人一本の線香を立てて見せる。

いかにも情景がよく出ている。時代は移っても、まだまだ炎は廃らない。

〔四〕

上席へつかつかと元官吏

(方大)

習慣というものは怖ろしいものだ。世は移っても官尊民卑のしきたりは今でも残っていて、なかなか改まらない。

何かの集りで寄っても、元官吏だった人は今の立場を考えずにつかつかと上席に着きやすいものである。それは知った人が上席の方に多いので、ついその方へ何んの気

もなしに歩を運んだとも言えるが、当然前官待遇をしてくれるものと言う、元官吏心理がそうさせるのである。面白いネライだし、軽い穿ちの句だ。

〔五〕

煮凍りよ少年の日は貧しかりき

(蕉風子)

煮凍り、少年、貧しさと並ただけでも、私には自分の少年時代のイメージが浮んでなつかしい。

肴の煮凍り、特にかれいなどの煮凍りを見るとなんだか可哀想な気がしたものだ。肴などのない煮凍りを、あたたかいご飯の上にのせて、ご飯にしみ込んでゆくのをうれしく眺めていたものだ。そうしたご飯をむさばるように喰べた少年時代のあったことを思い出させてくれたこの句に感謝したい。

〔六〕

色あせぬ間に恋せよとまんじゅしゃけ (後江)

曼珠沙華(まんじゅさげ)は一見燃えるような華やかな花であって、何となく淋

びしさを誘う花である。彼岸花とも呼ばれている。堤や路傍や山足などに自生している毒草で、翌春には枯死するそうだ。

わたしのように燃えるような美しさであっても、いつまで続くものでないから、恋をしなさいと、まんじゅさげに言わたのである。三十女へよびかけているような句だ。

〔七〕

菊の葉の天プラ秋を召し上かれ

(二栄)

菊の葉の天プラなんて、一寸シャレたものだ。この句、ネライが面白い。「秋を召し上かれ」の措字がこの句を生かしている。淡々として何の奇もないが、捨て難い。表現技巧の妙味を十二分に発揮した句だ。

〔八〕

男知らぬ色気はただの物真似や

(北海)

色気というものは、持って生まれたもののようでもあり、環境で育てられたもののようでもある。その両方が合致して他人の真似の出来ない色気を出している女もいるようだ。この句の作者は男を知らぬうちはホントの色気でない、それはただ物真似にすぎないと詠んでいるが、それはそれとしてうなずけないことはない。私は曾て初代

鴈次郎の色気、梅玉の色気、六代目(菊五

郎)の色気なんて天下一品、あんな色気がどっから出るのか、その震源地がわからないので、義助(今の三津五郎)に聞いて見たことがあるが、「やっぱり努力だんなア」といっていた。努力だけで、あんなこぼれるような色気が出るものか、どうだか訝わしいと思う。

〔九〕

表彰をされてる方に髭があり

(日満)

「そう言やア、そうだなア」と言う句だ。

表彰される人が、何で今まで髭を生やしているのか、そこまで追求する必要はないが、何だか世間に疎い人間のような。世事には疎うても、その道一筋にすすんで来た人に違いない。髭は生えるにまかせて生えたのかも知れない。特種な場合の写生句だが捨て難い。

〔一〇〕

朕惟うにの頭が参観してあきれ

(好祐)

教育勅語で、育つて来たものが、今時の学校へ参観に行つて、これでいいのであるうかと呆れたという句であるが、この句からは、どうした点にあきれたかは判らない。

しかし、三歩退つて師の影を踏まずと教えられたアタマ、君に忠に親に孝に叩きこまればアタマには、先生を一労働と考へ、親のことでも平気でアクセスに話す生徒たちを参観したとしたら、「参観してあ

きれ」だけで充分、その相違がうなずけるのではなからうか。参観されたあるお母さんの話では、先生の質問に対してうちの子があんなことをと、思わず顔をあからめることがたびたびあるそうだ。イヤ、うちの子だけではなく、よそ様のお子さんと同じなんですという話。あきれられるよりも教育は一定不変のものでないということを参観者自身が悟られるより仕方がないだろう。

〔一一〕

母の趣味おさんどんとは情ない

(酔夢)

この句を一読すると、薄暗い台所を根城として、その一生を惜しみなく過ごした過去の女を思われるが、おさんどんを趣味とすることも曾ての母の宿命だとも言えるし、それはそれとして忍従の尊い姿だとも言えるだろう。女権が拡大されて、女性があらゆる方面に活躍されることはのぞましいことには違いないが、おさんどん趣味の母よりも幸福だとは言ひ切れるものではないと思う。

〔一二〕

叱られて来たとB G パフ叩く

(光道)

「組合運動で走り廻わろうと、廻わるまいと、それはワタシの自由だわ、課長さんから、それを兎や角言ってもらいたくないわ」

と、彼女は自分の椅子にもどると、早速抽斗から、バフを出して叩きはじめた

言うのである。

近ごろのB G 心理をズバリとつかんでいる。

〔一三〕

飽いて来た二号を妻が可愛がり

(阿茶)

夫の浮気がいつまでも続くものでないことを知っていた。あれほど愛していた二号を、手足の千裂れたおもちゃのように見向きもしなくなったので、奥さん奥さんと慕い寄つて来る二号を却つて妻の方が哀れに思つたのであろう。この句からは物事におおらかで、どしりとした奥さんの姿が浮びあがってくる。

〔一四〕

アイシャドー親に従う顔ならず

(和三郎)

新旧思想の衝突を諷んだ句はいくらでもあるが、この句は、親から見れば、まるでお化粧のように思えるアイシャドーの化粧をする顔を問題としたものである。

「アチラさんの化粧なんて、胸クツがわるうて見ちゃおられん」と言うのが親の考え方

「だって、流行がそうさせるのだから仕方がないわ」と言うのが娘の言い草である。

問題はアイシャドーの顔だけでないことがうなずける。

いつもダンブカー以上の衝突はまぬがれま

〔一五〕

あなげに月給やる軀に産れざる

(靈眼子)

「こんなに、こき使われて、これっばかりのサラリーとは情ない話だ。なぜオレは月給をやる身に生れなかったのであろう」と、サラリーを貰うたんに思うと言うのである。浅はかな考えではあるが、一部のサラリーマン心理を衝いている。しかし、斯うしたことを夢みている男は、月給をやる身に生れたとしたら、約手に追い廻わされたり、金策に苦しめられたりした時に、毎日出勤さえしていれば、サラリーは這入るし、ボーナスは転ろがり込むしと、サラリーマンを羨望するのではなからうか。

(続く)

結婚式場 長生殿

近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場 貸衣裳も
豊富にそろえております ●6階



大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171

川柳塔

大阪市 市場 没食子

大晦日お墓参りがまだ残り

金出せば夜警も人がしてくれた

三カ日局へバイトの子だけ起き

持って死ぬつもりはないが倍増の世

老眼で入れ歯でしかもはしまめで

社がつぶれてもと組合すこんで見

大阪市 正本 水客

気ままに歩いて禪寺のただ白く

ほろ酔の天を相手にしてあきず

教養が邪魔していると思ひこみ

貧乏くさいことばかり選って言う

高槻市 若柳 潮花

おみくじにすぎる生活を笑われず

立呑みの裾で舞うてる新聞紙

妻にない温みと思う膝まくら

母になる顔はネオンが消えてから

びしょびしょに濡れて戻った共稼

大阪市 北川 春 渠

煉炭火鉢開けっ放しの大晦日

寝正月消費景気と見るテレビ

ハワイ 羽佐間 柳 葉

更生を叫ぶは飲まぬ時の事

生活に骨やかされてもバカンスだ

堺市 吉田 圭 井 堂

好きで守^もっている孫でない老婆

酌ぎもせぬくせにサービス料つけて

防府市 長野 井 蛙

小企業課長も同じ巻脚絆

事故対策まとまらぬまに繰返し

執着ののれん時勢に置き去られ

岡山県 直原 七 面 山

食べられるネギが落ちてた田舎道

父逝って嵐が去った跡のよう

口説かれてる楽しさも女なり

取材と言う剣で被疑者を吊し上げ

どう寝ていたのかあの部屋にピアノ

子らに突き上げられて貰った後妻です

まだ残る色気を女金に代え

鳥取市 河村 日 満

代議士も積残された松の内

飲み足らぬ腰バンザイで締めくくり

階級意識は包み紙にも

豊中市 足立 春 雄

代表に選んでおいて寄附をとり

又しても小数意見とほうむられ

倉敷市 木村 千 容

腕組まにや歩けぬという御時世や

台所うるおす政治欲しい春

倉敷市 田垣 方 大

ゴムバンドためてBGふけてゆき

掃除婦の誇^{ほこ}りは皇居の見えるビル

捕^{つか}まった時はノータイだった詐欺

東風吹いて匂いおこした高女^こ三

大阪市 木村 水 洞

麦を食え秋刀魚を食えの人づくり

寝正月も出来ない職に誇り持ち

鼻唄ではこりを叩く妻を持ち



大阪市 後藤梅志

退職近し（四句）

奈良県 飯降白香

手袋の穴に気がつく松の内

辞めてからする計画があり余り

初釜ヘスカートの娘も畏り

公害都市セキまで入れているテレビ

お別れの宴へいつもの唄が出ず

奈良県 西辻竹青

松の内歌謡曲とは変り果て

またしても成人病のことにふれ

潮時を待つ本心は静かなり

新春録音「日本は好きですか」には驚いた

老兵の春うぐいすが鳴いてくれ

寒波強しつぎつぎ祝辞長すぎる

米子市 小西雄々

出雲市 尼 緑之助

門真市 福島鉄児

自動車に轢かれるよりは寝正月

日本は唄ってばかりいるテレビ

僕と云う女の子です持て余し

ステレオを間借りの四畳半に据え

成人式へ三男ふふんと笑った

岡山市 服部十九平

大阪市 山川阿茶

大阪市 水谷竹莊

歳時記を無視して温室花をつけ

初詣りデイトの様に待ち合せ

栄養士味の事にはふれはせず

バリーでの夢奈良漬に金山寺

加賀市 那谷光郎

柳井市 弘津柳慶

マスコミを人間国宝うるさがり

退屈を老は古材の釘を抜き

母八十一にて他界

尼崎市 長谷川三司

つかまつたスリの胸にも赤い羽根

西へ母送るも孝の一つかも

病室で見る元旦の空は白

祖母頑固灯明だけは電化せず

鳥取市 杉谷湖山

「おじいちゃんの入院」孫の綴り方

大阪市 福井野迷路

西宮市 若林草右

パンのみで生きる人間のみが生き

寒さには馴れたが雪にはまだ弱く

お隣りの門先かりて初写し

ニーチエに思う

七十にして貯蓄の方法教えられ

抽せんがすんで年賀が迷いこみ

永劫の回飯明けましてお目出度う

京都市 大鶴喜由

岡山県 田村藤波

下関市 桜川不水

そろ盤で割れば性欲だけのこり

万円札出しても小店軽うとり

張りかえたフスマへ孫達やって来た

情熱の程度をためし惚れもせず

父親の許しを母が言い渡し

岡山市 浜田久米雄

男は恋女はフレンドと思ひ

無欲恬淡説いてお布施を持って去に



児島市 本田 恵二朗

人品いやしからずバチンコ屋でねばり

いつつでも袂に縛があるも老母

京都市 松川 杜的

こんにちは赤ちゃん育児日記の扉

堺市 高崎 雄声

女やがては一糸まとわぬ様になりやせんか

秋の朝車内は語る人もなし

島根県 藤井 明朗

日本髪歩き方まで教えとき

紙くずになるとも知らずファンレター

岡山県 永松 東岸

母臨終

病む母の抱けばだかれたままねむり

目をあけて見るのみ母に答えなし

母の死

目があきはせぬかと白布又外す

母の死へ母と歩いた道恋し

倉敷市 野田 素身郎

株の本ばかり読んでた三カ日

かつぎ屋がきれいな大阪弁使い

くだらない議論の果てに乗りおくれ

吉屋市 丸川 初甫

元日へエブロンだけが新の母

駅前にクーボン券の旗が待ち

連れてゆく子のスタイルは気にならず

岡山県 池田 古心

エンジンは順調土工酷使され

大阪府 早川 清生

正月の女に炊く音がある

青い海へ貧しい村がしがみつ

黒人に嫁し同胞を避けて棲む

大阪市 西出 一栄

ルビー婚式を迎て

風雪に堪て少しは角がとれ

暖冬と知らずや梅の正直な

堺市 辻 圭水

中三生家での笑い忘れさせ

孤独まだ爪かむ癖が直ってず

ライバルの英語がききに聞えて来

大阪市 橘高 薫風子

日名子旅館にて

妻の乳房ゆらゆら温泉の広さ

むらさき丸にて

子の育ちぶりよキャビンのベッドにて

下関市 中村 九呂平

お行儀に坐ってスカート膝を出し

文化章照れかくし云う純情さ

奈良市 宮口 笛生

十二月三十一日夜勤に出

正月が晴れてお金を使いに出

大阪市 榎本 蔭児

時世かな裁判所にも赤旗が

スポーツ紙隣の顔のわずらわし

大阪市 西川 晃

毒のない嘔吐くにさえどぎまぎし

成金のはなし聴いてて滅入りこむ

やっこさ寒になったら呆けはじめ

鳥取県 田中 蛙眠子

梅屋にも寒さにも耐え十二月

帝釈峠で

鬼楓観光客をつかみそう

神戸市 仲どんたく



定退の琵琶の師匠で生きる髭

長谷川一夫を観る

二枚目の足が洗えぬ五十過ぎ

お正月サナトリウムも里帰り

平田市 久家代仕男

寒空に鼻すり上ぐ妻が無く

母を恋うドラマ子の眼は何と見る

スパルタで家出放任でも家出

御時勢は何処吹く風の観世流

大阪市 本多柳志

娘を嫁がせて(六句)

お見合いへ娘は淡々とお茶を立て

重ね折り奉書目出度い墨を吸い

日を決めに来て仲人の白い足袋

デパートへ母娘うれしい日がつつき

かけまくもかしこし8ミリ丈廻り

嫁った娘の余香のへやへ立ちつくし

出雲市 原 独仙

寝正月ここ山陰は雪しぐれ

西宮市 野呂鶴汀

未亡人未だ緋の色が好きであり

待ち呆け傘のしずくは乾きたり

旅先で百円借りた有難さ

妻にして最早演技は行なわず

西宮市 樋口舟遊

お手伝さん通勤定期で米やはった

孫返えす朝は二人の卵焼き

新潟県 高野むじな

ころんだ子起きぬ育児法とやら

親が決めた形にさせた嫁が来る

悪書追放も宣伝にするつもり

大阪市 石倉旅風

週刊誌だけの靴の社長にて

残り福ブライド云云する人が

死ぬことを嫌味ではなく言える歳

いい加減な事が嫌いな老夫婦

歌舞伎座でいつも見かける老夫婦

老夫婦チャックをつけたものをはき

地下街を先に見て来た老夫婦

一日をキッチリ暮す老夫婦

せぬ事は口には出さぬ老夫婦

大阪市 魚住満潮

続・西成界わい

不渡りを出してスードショーにいる

霊柩車一台坊主が笑い顔で乗り

8の字に寝てる男女に陽が一ぱい

枕元に便器生活保護をうけ

赤い血を出して死んでる街のダニ

刑務所^{わしよ}帰り大きな鯛で迎えられ

遺留品定期のパスは切れている

三度目の母さんが来ましたと綴り方

愛媛県 村上旭童

酎一合で忘れる怒りなのか君

神戸市 傍島静馬

一陽来復社名変えても未だ成らず

玉砂利によるめく母と腕を組む

舶米を着ているほうが息子なり

笠岡市 木山遠二

連休かそうか病棟ひっそりし

病よし元校長と日向ぼこ



大阪市 仲谷 ハナ子

下心あってアパーまで送り

岡山県 横山 一声

科学がどうのこうのと方角は気にし

自家用車おっちょこちょいに金があり

神詣りの帰りに交通事故にあい

大阪市 平 沢 保美

パフ忙し鼻筋小鼻額など

不渡りになるとは知らず初荷出し

年末を待ってた様に血圧が

飯台の上が嬉しい男の子

小松市 関戸 宗太郎

ランドセル苦勞の種を背負い初め

松江市 舟木 与根一

絵葉書と同じカメラアイに立ち

株少し持ちケネデイがケネデイが

きもの着てはらはらさせて松の内

桐商の昔をしのぶ大火鉢

いい嫁が来た煉炭の火の赤さ

足で戸を開けそうな娘にはあわて

エンコして御用始めの宴にもれ

布施市 森 下 愛論

豊中市 林 夢 虹

スーパーの隣りで高級品が売れ

口紅を落してパートタイムの女去ぬ

悲しきは少女に飛べぬ溝があり

山口県 安平次 弘道

日溜りにエプロン掛けがよく喋り

新子さんへ

病院を変えるにさえも嘘がいり

大阪市 河 井 庸佑

まっしぐら足袋の白きを汚すとも

切りましようと外科医は楽しそうに言う

つくづくと椅子のちがいを感じさせ

大阪市 今 西 生 薑

雑踏を見わたしスリの初笑い

大阪府 谷 沢 好 祐

妄念が炎えるか曼珠沙華の赤

雑踏を見わたしスリの初笑い

選挙して歩だけが少し入れ替り

B・Gに酒つげという猛者も居り

諫早市 川 岡 靈 眼子

売っという後は野となれ年賀状

二人ゆく影白樺に淡きもや

霊学の立場から

愛媛県 横 紫 光

セックス論女子学生が口火切り

考古学日本神話を寒うする

労組へ来ると課長も弱くなり

京都市 室井 八九寸

神いうてある時分裂症にされ

見渡せばわれ悪友にことかかず

低姿勢に安定してる奴唄

貝塚市 杉 本 一 鶴

仲人の口ほどお喋りまくなし

悼 矢倉仙助氏

思う存分歩いてみたい土の香に

青森市 工 藤 甲 吉

極楽の歌信を京に待つ師走

鶏の骨た、けば我が身打つ思い



数字の政策愛がともなわず

岸和田市 内藤きさ子

断りをいうにもあったやさ言葉

新品は良しとえせんくばさみでも

おもちゃ屋がなんときれいな十二月

十二月に借られてからの不仲なり

元日の炎見つめて思うこと

三ケ日喰べて坐れば胃が怒り

青森県 木村涼人

ベレー帽晩酌〇・二リットル

屋台酒硬貨ポケット糞と出る

何を好んでかしました世の首長

役人の丁寧過ぎて無気味なり

裸銭真つすぐパチンコに向い

青森県 唐崎専翁

ありがたや金へ頭を下げていた

倉敷市 奥谷弘朗

嬉しさは養女に成人式が来た

笑いにも言葉と同じ新鮮味

兵庫県 遠山可住

経済の波がヒタヒタ神戸港

立志伝決して泣かない子で育ち

乗りおくれまでして引いたはずれ籤

貪之に育ち反省真にふれ

兵庫県 河原みのる

米代はとつくに飛んでお正月

博文をもう疑いの目ですかし

有線放送

年頭の辞などだれも聴いとらず

姫路市 隠岐不醉

我が年を言わずに一寸地味かしら

誅求を自然増収とうまく逃げ

鳥取県 清水一保

九州の旅より

桜島昨日は怒り今日は笑み

道連れとなつて互いの標準語

新年も師走もないパチンコ栄え

出雲市 中川晃男

顔までは責任もてぬ散髪屋

真つ先に手を出してみる次男坊

西陽当たる裏階段にある孤独

松江市 柳栗鶴丸

無神論信ずるものは君と僕

兄弟がこんなにも違う歩と香車

正確にサラリー運搬して平和

京都市 都倉求女

元旦の空を宣伝機が穢し

カレンダーまた一年を叱咤する

出せば出したで雨でも日の丸片附けず

兵庫県 大江秋月

相談欄私と同じなやみ持つ

巡回の線路に人形落ちていた

大阪府 松田半月

寄付というのに割り当てはおそれいる

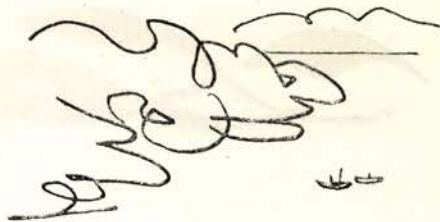
キロワットかまわず妻の手内職

竹原市 山内静水

元日のしずけさハイヤーだけ走る

今治市 越智一水

紙の村小川静かに流れたり



短評

二月句会にて

清水 白柳

手術台誰憚ろうイエス様

いわを

作者のいわをさんは只今入院、御加療中でありまして、日も早く退院されることを心からお祈りしています。この句の手術台は、作者の体験なのかどうか知りませんが、手術台に上るとき的心境をまざまざと詠んで居られます。作者はクリスチャンなのかどうかは知りませんが、このイエス様は適確に詠まれていると思います。仏様ではナムアミダブツですからいけなしいし、新興宗教でも句に共感を持たないと思います。誰憚かろうという句の焦点がハッキリ胸にうつたえるものを持っています。

知る

水客

淡々とした句境を感じさせられました。この別れてきた人はどんな人であろうと、そんな事をせんなくさせないような句語の使い方に教えられるものがあります。移り香もなき人という作者の感じを深いものと知らねばならないと思います。

急期

圭井堂

セルスの胸まっさきに羽根をつけ 春 巢

生んだ子の数でももめる倦この句のポイントは数でももめるの、でもという二字にあるとい

えます。倦怠期の出来事は色々句に詠まれています、数でもというつかみ方には敬服いたしました。

人を信じる事が出来この

頃幸福 梅志

句意は申し上げるまでもなくおわかりと思いますが、この句は詠まれたように、破調になっているのであります。申す迄もなく句は定型を基調としていますがこの句のように、止むを得ない破調、つまりどうしても定型にはまらないギリギリの破調は認めてゆきたいというのが私の信念なのであります。それを申したかったのでこの句を採り上げたのであります。

憤懣はせめて座席を広くと

り 雄声

小さな親切とか迷惑防止とか、この頃の新聞などによく目につく文字なのですが、この句のように座席を広くとっている男の心境を深くうがっているのは面白いと思います。やり場のない腹立ちに足を大きくひろげている男の顔まで想像出来るようです。それは、せめてという三字によって表現されているからだと言えるでしょう。

虫聞いているのか風呂に音がなし どんたく

この句のよさは虫聞いているのかという上五文字にあると思います。静かにぬくもっていて、湯の音もしない風呂場へ月がさしているのでしょうか。その風呂の中で虫

でも聞いているのだらうと感じた作者の詩情がこの句を品格の高い句にしたのであります。

茶をたてる妻があやしく他人めき 鶴汀

この句に心をひかれたのは、あやしく他人めきという句語ですがこのあやしくという字をひらかなにした作者の心にくいまでの心づかいであります。怪しくではないけな。妖しくでも強すぎるようであり、矢張りあやしくでなければと作者が表わしたのであります。それが成功しているのだと思います。

文化の日終日パチンコ屋で過し 満潮

続西成界わいという前書きで毎月発表されている一連の句のうちにあります。文化の日といえ、だれでも菊花がおる会場の数々の催しを思い、また文化勲章などを思うのだが、そんなことには無関係に、そんな旗日があったのかとパチンコ屋に居たのか、または旗日なので仕事にあぶれてパチンコ屋に行ったのか、とに角文化の日というものに鋭い風刺を感じさせられたのであります。句の仕立方も堂に入ったものだと思います。

青年の心よ大阪城の草に濃淡 夢虹

この句も破調であります。破調の句をよく採り上げるので破調の句がよいのではないかと思われるのであります。この句の

ように破調であるがために句に力強さが感じられるものは、うれしいことであります。この句を読んだ時思い出されたのは「草に寝て志ある二十一」文久という句であります。この句は何十年も前の句であります。草に濃淡という作者の若々しい感覚が尊いと思えます。

金返すときは靴音まで違い 与根一

「妻や待たん靴音を高めんか」路郎という名句がありますが、うれしい時は靴音でわかるという上七文字によって生きているのであるといえます。

月賦だけ残り車も人も近き 弘道

誠に悲惨な出来事を詠んでいながら、それ程ドキッとしなないのは、月賦だけ残りという句語にあると思います。その句語のもつ穿ち味に救われているのだと考えるのであります。

幸福はすでに亡父の歳を生き 静水

真実味を感じさせられた句であります。そして本当に素直にしみじみとその作者のけいけんな気持ちが胸にしみこんで来ていると思いました。ハタタリのない句といえます。

ベルトコンベア式に月給運ぶなり 一路

たしか満潮君の古い句に「十二

月金の仲仕やなどというの
があったと思うのですが、その句
意を現代式に表現するとこの句に
なると思つたのです。ベルトコン
ベアを着想されたのがよかったの
だと思いました。

女盛り瓜田へくつを入れた
俊江

梨下のかんむり、瓜田のくつと
いう格言は、人にあやしまれるよ
うな態度をとつてはいけないとい
ういましめなのですが、その格言
を生かして、女盛りの欲求不満と
いったものをよく描き出している
と思います。格言を採用した作品
は、どうしても理屈っぽくなる欠
点を持っているのですが、この
句はうまく出来ていると感じまし
た。

能のない鷹のようなプロレ
スリング 鮎子

この句も能ある鷹は爪かくす
という格言を採用しているのです
が、この句も成功しているといえ
ます。それは能のない鷹のように
感じた作者の風刺に共感が持てる
からであると思うのです。

白珠の歯にしむ酒の値があ
がり 愛鳩

白玉の歯にしむとほる秋の夜
の……という牧水の歌を採用して
作句されているのです。酒の歌も
沢山あるのですが、その中からこ
の歌を採用されたのはこの歌が広
く知られているからで、そこに作
者の手腕がものを言ったというこ

とが言えると思います。

洗濯機にくもが巣を張る農
繁期 五朗

こんなところまで気のつく作
者のこまかい神経に感心させられ
ました。洗濯機といえば白いきれ
いなものでとてもくもの巣など
を想像することが出来ないのです
が、それにくもの巣が張っている
程の農繁期の長さというものをこ
の句から感じさせられたのであり
ます。

特売場来年着せるシャツも
買い 万幸

女心をよく描き出していると思
います。来年着せるシャツも、
というハッキリした句語がこの句
を成功させている点に注目したい
と思います。

最後にしめくりとしまして、
路郎先生の不朽句帖の中の、

振りむけばやっぱりついて
来る妻よ

に心を打たれました。こんなに
温い、思いやりの深い句はないと
思います。やっぱりついて来る妻
よ、これは霞乃先生のことを詠ん
で居られるのであります。路郎先
生の川柳生活六十年余の今日此頃
の心境を詠われたのであります
が、その六十年の川柳生活が並大
抵の御苦労でなかった事を知って
いるだけに殊に心を打たれたので
あります。両先生揃つての川柳生
活の御苦労をこれほど感じたこと
はありません。"やっぱりついて
くる"という、ほのぼのとした思
いやりにみんなが教えられてゆか
ねばならないと思います。

以上で句評を終わることに致し
ます。

(二月から)

明治・大正柳誌巡礼



奥津啓一朗

大正十三年(一九二四)

一月十日、羽衣、創刊号、菊判共
表紙十頁、神戸市小河通八丁目一
三三中島方羽衣川柳社発行、編集
発行人神戸市湊川町四丁目 中川
霧太。一部十銭。

中川 霧太
薄情を責めるつもりで女来て
三条 峰月

お休みになつたところで水枕
樋口 夢明

敗戦の唄炭飯の日が暮れる
中島 柳坊

中島 柳坊

朝の風呂冷めた、水がほとり落ち
創作欄には前田青岸、小田夢
路、梶元紋太、馬場路二、内藤風
柳、高橋古城山等の名もみえる。
(太田かつみ氏より頂く)

一月二十八日、あけぼの、第二
号、菊判二十二頁、平康府外寺洞
あけぼの川柳社発行、編集発行人
時繁友吉。奥付には三十日発行と
ある。非売品

時繁愛の人
吾ながらはてなと思う年になり
化粧の手やめず待たせる記を言ひ

愛の人(各地先輩及柳友諸氏
へ)あけぼの一家吟(雑詠)愛の
人選、八坂静の人(愛の人足下)
募集吟横山大納言、時繁愛の人、
菊川泰平葉各選、外に俳句、短
歌、都々逸等が載っている。

後記に

当社内を改革して同人の数を
減じました同人として踏み止ま
った人は私(注、愛の人)と満
州流、室山子の両君と外に夢想
樓君を入れて四名となり他の人
は皆当社の社友として飽迄も尽
力をして下さる事になりました
理由は船頭多くして舟山に登る
弊を避けたためです社友とい
つても同人と同様です云々
とある。

大正十三年三月二十八日発行の
第四、五号合併号以下不明。
二月十五日、川柳雑誌、創刊

号、菊判三十二頁、兵庫県武庫郡
鳴尾村字寺ノ後四四番地川柳雑誌
社発行、編集発行人 麻生幸二郎
一部拾銭。

麻生 路郎
ひるひなが蠅とる用がある

現代人の思想にびつたりと触
れた時と云えば川柳の外にはな
い。我等は此の川柳によって人
生を的確に批評して行きたいと
思っている。

と、外に

(誤れる川柳観を排す)、麻生路
郎(末弘博士の「暴政は人を皮肉
ならしむ」を読む) 吉川啞人(句
の境地) 近作柳樽(雑詠) 路郎
選、川柳塔(同人雑誌) 募集吟
井上剣花坊選(仲人) 岸本水府選
(花輪) 吉川啞人、竹田蘆穂共選
(出世)等が載っている。

同人は岩崎柳路、石井風人、原
史風、橋本二柳子、西垣松雨、吉
川啞人、太田一声、太田徹底郎、
高橋かほる、高橋古城山、竹田蘆
穂、中川露太樓、宗清夜調、黒田
佳扇、柳川洲馬、山岡剛山、松本
助六、小泉飛水、酒井零骨、宮内
一洲、平井光太樓、森田輝翠、盛
井耕垣、関本雅幽。(河相す、む
氏蔵)

昭和十八年十二月一日第二三九
号を以て雑誌奉還、二十一年八
月一日復刊本日に至る。



川傍柳初篇研究(一二)

丸十府高須啞三味
岡田甫前田喜代人
○ 岡崎重義
川端柳風清博美
藤井和雄

(8才)

122 柏をかみわってハ琴の邪魔をする

鼠弓

高須 五月節句に、琴を弾く姉の邪魔をする、腕白弟の句。「柏」は柏餅の略で、それを食いながら、琴の邪魔をしているのである。

前田 二「柏」は餅でなく、実であろう。でない「かみわって」が変で、邪魔をするもピンと来ない。実を「かみわって」その音で邪魔をするのであろう。従って、五月節句、姉の限定は必然性に乏しい。まして琴となると、姉より嫁の方が、古川柳には多いのではないか。

岡崎 二前田説に賛。しかし柏の実と言えばドングリのようなものと思うが「柏をかみわって」には、何か置れた意味があるのではなからうか。

清 二「柏」は、やはり柏餅でよからう。「かみわって」は子供のしぐさを誇張した

表現と見、琴をひくのは嫁で、その子の母親と解したい。

藤井 二句意は確稿に賛成だが、柏を「かみわって」に、少し疑問が残る。

丸 二第一句から不解。確稿よりないとは思いが、小生も「かみわる」に、どうもしつくりしないものを感じる。

岡田 二柏の実はドングリで、決して食べられない。似た形の椎の実を食べるが、ドングリは食べるとドモリになるといって、子供に恐れられた。だから「柏」は、確稿の「柏餅」説より仕方がないし、「琴」となると、やはり姉であろう。柏餅を食べるような子供のある嫁は、もう琴などひく余裕はないだろう。柏餅をドングリかみわったり、アンだけべろべろなめたりして、姉は琴などひいてはいられぬ。そういう幼い弟の世話をしなければならぬからだ。柏餅を柏で表現した類句を一つ

(タル三二13)

女連が集っての柏餅づくりで、おしゃべりが止むと、柏餅が出来上がった、という句である。

前田 二下関地方では、ドングリの実も、椎の実というて食べる。御参考までに。

岡崎 二柏餅を「かみわる」というのがどうもいただけない。

藤井 二諸説傾聴。だが、私もどうも「かみわり」かねる。

高須 二この句が、江戸の句であることを先ず皆さんに御理解ねがい、「かみわる」に余りこだわるのは、変と思う。子供が柏餅を一口に食べられるはずがないので「かみわって」その残りは、まだ手に持っている、そういう状態を言っているのである。

123 からくりを売って淋しひ花火売

閑々

高須 二不明。判りそうで判らぬ。

前田 二「からくり」は「のぞき」からく

りで、紙芝居のようなものを、穴からのぞかせ、節をつけて、絵を物語る。その「からくり」を売ったので、勇ましい花火売りが淋しくなった。

岡崎 二不詳。

清 二「火の車」という言葉が、当時あったかどうか知らぬが「からくり」という言葉には、経済的「やりくり」を意味したものもある。従って、いせいのいい花火を売っているが、そのフトコロには火の車である——という句と違うか。

藤井 二「からくり」は、仕掛花火のからくりであろう。豪華な川開きの仕掛花火、この夜のために精根つくした花火師の、苦心一年の作品も、一瞬に消えた後のむなしさ、さびしさ——そんな心理を詠んだ句としたら、大したものだが……。

川端 二「からくり」は「仕掛をする」の意があるから、仕掛花火説に賛成。

丸 二何かの都合で「からくり」(のぞきからくり——前田説の如し)を売り払って花火売りとなった。その様子がさびしげである、と解する。覗きからくりは、子供相手の賑やかな商売なのに引きかえて、細元手の花火売りの行商は、同じ子供相手でもまことにさびしいなりわいであった。

岡田 二丸説の通り、覗きからくりを売って、やはり子供相手の花火売りになったのだが、当時の花火売りは、胸の前に箱を下げての商売、やがて夏がすぎれば、他の商売に移らねばならぬ。からくりは唄を歌って、面白おかしく商売したが、花火売りは呼び声も立てられぬ。老年になってからの

零落の姿に、人生のさびしさをしみじみ感じているのである。

藤井「商売済の句とは気がつかず、妙な解をして、恥ずかしい。」

高須「全く、そんな過去と現在を詠んだ句とは思えず「判らぬ」と書いたが、両先生解で、古句にもこんな句があったことを知って叩頭！」

124 仏迄指ひさしをする初鯉

門柳

高須「初鯉を賣うのに、故人まで引き合に出した、という句で「死んだ親仁さん」も、初鯉だけは、ムリしても食った。まあ高いが、買って食おう」ではないか？

前田「初鯉は美味なので、仏まで指さしをするというのである。変った句として初鯉かと僧正はむがでさき

(タル十一・24)

があり、共に初鯉に対する関心を詠んだ句としては常識的であるが、面白い。

岡崎「江戸の初鯉は、四月ごろ鎌倉から馬または舟で来るのが一番早く、そのため鯉を「鎌倉の魚」などと、鎌倉が本場のように言った。この「仏」は、何か鎌倉の縁語ではないか、と思うのだが……」

清「何れにしても、江戸人の初鯉に対する異常なまでの関心を詠んだ句であろう。」

藤井「磯稿に同感だが、親仁はせつとかせいで、初鯉なんか一口も口にしなければ、一口仏に食べさせたかった、と仏を指さしての子供の迷懷であろう。」

川端「「仏」を鎌倉の大仏と解し、岡崎説に賛。鎌倉を出荷する初鯉を、大仏まで

も見送っているの意と思う。

丸「初鯉の出る四月初めの八日は花祭、誕生仏は天地を指さして「あれを食え」とそのかしているようにも思える。という句である。」

岡田「丸説の四月八日の灌仏会の句である。この日釈迦の裸像に甘茶をかけるが、その像の手が天地を指さして「あれを聞け、あれを食え」と言っているように見える。即ち「目に青葉、山ほととぎす、初鯉」の季節だからである。」

僧は聞き俗には食えと釈迦教え

(タル二四・7)

藤井「「俗には食え」で明解。釈迦が主人公とは意外であった。」

高須「岡田先生解で成程だが、初がつお礼讃句としては妙な句だ。」

125 じふくをまたいで追人ハこきぬかれ

泉河

高須「「じふく」は、壁下などの地面に接した所に取付けた横木。入口の地幅を跨いで、追人が一人ひきぬかれた……」ということは、どういうことか。それが判らぬ。」

前田「「じふく」は時服、その時候に應ずる衣服。江戸時代は、將軍から大名、旗本に賜わった。その時服をまたいだので、追人が失敗してしまった。その追人は、松カ岡の追人か？」

岡崎「松カ岡への追手のようだが――」。

清「不明。」

藤井「時服説に賛。將軍からの拝領物をまたいだのが、追手の千慮の一失。初志貫徹できなかった。もともとそれを予期して

の一芝居だろう。

川端「「じふく」は「十九」で、女の大厄年と解し「追人」を厄として、二十歳になって厄から逃れた、と考えていた。」

丸「「じふく」は高須説。ここは鎌倉東慶寺の門の地幅。駆け込み女、一歩これを踏ぐと、追手はもう手が出せなかった。この規制を知らず、女を追って地幅を踏いだ追手が、寺役人にこっぴどくどやされた、という句である。」

岡田「鎌倉の松岡山東慶寺は、いうまでもなく尼寺（明治中期から尼寺でなくなったが）だが、方丈、本堂への石段の下には男の寺役人がいたから、男が寺へ踏み込んだりしたら、許さなかった。駆け込み女が追手に追いつめられ、一歩足りない場合、地幅を越してカンザシ一本でも投げ込めば有効として寺役人が取り扱ったという。」

126 這ひ習ふ子の骨を折る瓜壱ッ

善橋

高須「ようやく這いはじめた幼児が、ころがっている瓜をつかむのに、骨を折っている情景で、軽いスケッチであろう。「瓜一つ」が、我々には唐突でも、江戸人には普通であったものと思う。」

前田「「瓜」は唐突ではない。瓜や栗などは、現在の普通の菓子に相当したことは万葉の昔よりよく知られている。句意には異議なし。」

岡崎・清「賛。」

藤井「子供は、買ったオモチャより、家庭にあるつまらぬものを、好んで遊び相手にする。勝手にあった「瓜一つ」で結構遊

ぶのだろう。

川端「磯稿に賛。」

丸「賛。佳句である。」

岡田「同。果物の種類の少なかった江戸時代には、瓜はもともと普遍的な青果であった。こんな句もある。」

瓜食ったとこで忘れる柄袋

(タル二二・26)

高須「「骨を折る」に各説が出ると思っていたら「瓜」に焦点が集まったのは、ちょっと意外であった。」

127 母の跡追ッてはしこを二三段

秋紅

高須「何のケレンもない、これだけの句だが、佳句と思う。」

階段を見つづけられずに子が上がり

珍茶坊

という句がある。小生の宅にも、いま二歳になる孫がいるが、これが階段へ行くたびに、家中で大ききわきをする。先日は知らずにいて、三階から転げ落ち、頭に大ケガをして、病院通いをした。」

前田「私には佳句と思われない。常識的で説明的な句にすぎない。ただ言葉のウラに幼児の動きが感じられるだけだ。」

岡崎「歩きはじめた幼児のははえましが、よくつかめている。」

清「賛。」

藤井「後から「マアあぶない、この子つたら」の声がかきこえるような句。」

川端「私も佳句と思う。」

丸「磯稿に賛。」

岡田「同。」

128 たいくつをすると泣出す公事相手 柳 水

高須Ⅱ「公事」とは「訴訟」のこと。訴訟のために共に出府している「公事相手」——訴訟だから、手間がかかる。毎日呼び出されるわけでもない。することもなくタイクツする。すると、郷里のこと、おくれしている農事のこと、敗訴した場合のこと等等、いろいろ考えて「泣きたくなる」ことだってあったろう。現在でもそうだが、とにかく裁判は長かったから、いろんな悲劇があったであろう。

麦飯の味も忘れた長い公事

(タル四)

二カ村をぬけがらにして公事をする

(タル一)

前田Ⅱ「公事」には①公務②朝廷の政務および儀式③賦役、課役などを勤めること④訴訟、でいり等の四つの意がある。礎稿は、その④をとっているが、それだと「公事相手」がわからず、たいくつして「泣き出す」人物がわからぬ。

公事宿に昼夜杖がごろつかあ

(タル二)

があるが、これは「たいくつ」に類する句であろう。④の訴訟にも、いろいろあろうが、どれであろう。

岡崎Ⅱ礎稿でよいと思うが、どうもハッキリせぬ。

清Ⅱ礎解でよろう。

藤井Ⅱ「たいくつ」して「泣き出す」のは、どういう「公事相手」であろうか？

大人とは考えられぬから、連れて来ている

子供でもあろうか。

川端Ⅱ同感、どうも「泣き出す相手」というのがわからぬ。

丸Ⅱ「公事」は礎解どおりで、この中の家督公事の対決の場面であろう。柳雨翁も「相手は後見の膝に抱かれていた子供」と言っている。

岡田Ⅱ丸説どおり家督公事。家督をつぐ子供が、たいくつして泣き出したりする。

高須Ⅱ丸・岡田両先生解(柳雨説)に叩頭。「泣き出す公事相手」が「膝にいる子供」とは、解き得て妙。

129 はやるやつひへかたまってあるく也

集 十

高須Ⅱ不解。

前田Ⅱ「はやるやつ」は、よく売れる遊女。よく売れるから、席も温まらぬ。「ひえかたまって」が、よくきいている。

岡崎Ⅱ賛。「はやるやつ」は、すなわち「流行ッ妓」で、まわしをとるので、一個所にじっとしておれぬ。

清Ⅱ賛。

藤井Ⅱ「流行ッ妓」とわかつて、なるほどと合点した。

川端Ⅱ前田説に賛。「ひえ」は「金冷」にかけたのではなからうか？

丸Ⅱ前田説でよい。

岡田Ⅱ同。遊女は、張り店の時は衣裳を着ているが、床へ入る時は、長襦袢のような姿になる。それで数部屋まわしをとつて歩くのだし、第一冬でも足袋をはかない。

「あったためにおくなんなし」が、彼女らの合言葉みたいなものだった。

高須Ⅱ「ひえかたまって」が、岡田先生解で氷解。なるほどと微笑する。

130 ひたいにも紫筋を出しどなり

閑 々

高須Ⅱ「額に青筋を出して怒鳴る」ということを、紫筋といただけと思うが、男根が怒張すると「紫筋」が出るといふからそれにかけてあるのかも知れぬ。

前田Ⅱ賛成。

岡野Ⅱ青筋を誇張して紫筋とただけで、男根には関係なし。むしろ、紫衣をはしがる座頭が、座頭金の取り立てにきて、いきり立ってある図と解釈したい。

清Ⅱ検校の資金催促の怒りと解したい。でなければ「額にも」が生きてこない。

藤井Ⅱ座頭が「間男見つけた」と怒鳴る高須説も考えられるが、やはり素直に岡崎説をとる。金々々の座頭だから。

川端Ⅱ同感、岡崎説でよろう。

丸Ⅱ岡崎説どおり、座頭の取り立て。岡田Ⅱ清説の、検校の物すごい強請(はたり)である。類句を左に。

恐ろしさ権木をもってはたなるなり

(タル一七)

聞き分けて検校たった二日延べ

(タル一八)

検校の始めて笑う御皆済

(タル六二)

(8ウ)

131 呉ふく店猫のひたいに竹がはへ

眠 狐

高須Ⅱ呉服店の「猫の額」ほどの庭に、竹が生えている、というだけの写生句。前

品質優良
タチカワペン
TACHIKAWA PEN
タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙
大阪市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社



句と共に「額」という題でも出での作句ではなからうか。昔の呉服店では、客に座布団を出し、茶など接待したから、ちよつと眼の先に青いものの生えた庭でもないはずだった。

前田Ⅱ判らぬ。が「猫の額」は狭い形容だから、礎解でよろう。

猫の額に白粉が咲き乱れ

(タル五六)

があるが、これは遊女の額であろう。

岡崎・清・川端Ⅱ礎解に賛。

藤井Ⅱ江戸の繁華街の呉服店、庭をとる十分の土地がない。猫額大の土地に、竹をあしらって、心ばかりの庭にしつらえた。

土一升金一升の大江戸の風景。

丸Ⅱ礎稿プラス藤井説で満点。同想句に「思出しに四五本竹を植えておき」(管一Ⅱ)がある。

岡田「江戸の大きな呉服店には、狭い中庭があるのが普通だった。一種の明かり取りでもあり、奥との境でもあった。広い店だに窮屈な庭をつけ

(宮二 33)

反物の中へ四五本竹を植え

(傍二、追10)

132 丸縄をきせぬと顔がやき切れる

鼠弓

高須「花嫁さんの句。『丸縄』は『綿帽子』で、花嫁のかぶる角かくし。だから、それでもかぶっていなかったら、衆人の凝視のために、顔が『やききれて』しまうだろう、というだけの、つまらぬ句。

一同「賛。

丸「その通り、だから『丸縄をはじめた人のはつめいさ』(タル一八六ウ)と、称賛されることにもなる。

岡田「文句なし。凡句。

133 御用の笠をかり水をくんで来る

五鳥

高須「雨が降っていて、水汲みに行けない。丁度そこへ御用聞きが来たので、その笠をちょっと借りて、水を汲んだ、という句で、手のふさがる傘では、ソルベで汲む水は汲めぬ。弱っているところへ、折よく御用聞きが来た。その笠のために、水を汲むことが出来た、というので、その御用に水を汲まなかったところが好ましい。

一同「賛。

丸「礎稿よし。但し『手のふさがる傘』という、その傘もない、一人ぐらしの素寒貧であらう。

岡田「井戸が水源の江戸時代の水汲みは、一仕事であった。

124 雪を燈火としてよむ急な文

閑々

高須「『螢の光、窓の雪』の実用版。用事をしているところへ、飛脚便が来た。折柄の黄昏時で、奥へ入って、灯火をつける手間を省き、雪あかりで、その文を読む、という句だが『雪をトモシビとして読む急な文』とは、三・九・五で、当時としては思いきった表現であったと思う。

一同「賛。

丸「もちろん孫康の故事を踏まえた句だが、用事をしているところへではなく、雪だからと早寝をした所へ、来た文だと思ふ。

岡田「そうであらう。

135 ひんな子ハしかられながら糸目持

鼠弓

高須「自分の服を持っていない貧乏な子供(貧乏子)は、友達の前上げに、手つだい(糸目持ち)ばかりさせられる、という句で『叱られながら』手助けにだけ使われている子供は、可哀想なものである。

前田「『糸目』は、服の釣合平均を見るためにある数本の糸。貧乏子は、服を上げることが出来ず、叱られながら、その糸目持ちばかりさせられる。

一文の服を縫う子あっている

(タル五〇)

があるが、この持たされる服は一文などという安服ではない。

岡崎・清・川端「礎稿に賛。

藤井「相手は大家の坊ちゃんだろう。落

語の『子のかすがい』を思い出す。

丸「諸説よし。

岡田「服を上げる子は、風向きを見て、服を手下の子に持たせて、立たせ、糸を持って遠くへ行き、合図と共に手を放させ、糸をたぐるのであるが、そのタイミングがまずいと、風がうまく上がらないので、金持の子は怒りちらす。

136 はした金めらを追出し門を打ち

五葉

高須「一人の太尽が、すごい豪遊をして吉原の大門を開めさせることで、一両、二両の端下金を使う奴等を、みな追い出して大門を打つ(閉める)という句だが一刻の価 一日門を締め大門の扉 片々五百両

などの句があるから、一日千両でそんな豪遊が出来たものらしい。

岡崎「紀伊国屋文左衛門こと紀文太尽が、吉原大門をしめ切り、廊中を総揚げにすること、三度に及んだ、という逸伝にもとづいていようが、史実ではなく、いかなる場合も、大門をしめ切めることは、制度が許さなかったらしい。

前田・清・藤井・川端「賛。

丸「江戸で日千両といわれた所が、魚川岸と吉原と二丁町。それで千両で吉原大門が閉められる、として詠んだもの。翌日ともなれば『これからは端下金だと門をあけ』(タル三10)ということになる。

岡田「吉原の大門をしめたのは、紀文一人との伝説あり。この句、紀文の豪遊を詠んだ句、と限定してよからう。

137 けうも忒分ふんだくったと情ウのなさ

一甫

高須「『忒分』は、前出の通り、吉原の普通の費用。世間ではかなりの額の金ネがここでは一夜の遊興費でもあれば、またチツ(ハナ)でもあった。初会から食わせてたいこ二分もらい

(拾七)

なんて句もあるから、そいつらは『今日も二分ふんだくって』やっくらいの無情な放言はしたであらう。

前田「賛。二分の句としては佳作の方。

岡崎・清・藤井「賛。

川端「『二分』は、また踊り子がころぶ枕の値段でもあった。

丸「遣手の口吻であらう。一人一分ずつ二人からふんだくってやっつた。三合目の遣手への祝儀は、一分が相場だった。

岡田「遣手とも女郎ともとれる。とにかく接客業者の情の無さよ。

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区高島町 5 (361) 9373代

支局 東京都千代田区神田鍛冶町 2 (291) 9629代

名古屋市中区村田町 2 (88) 9069

手前勝手

な

柳論



東野 大八

「貴男は、雑文はよくお書きのようですが、どうして川柳をお作りにならないのですか」とある人からの便りが届いた。私としては別段気にとめるほどのことでもないのだが、そういつてわざわざ十円切手を貼って下さったお方には気になることらしい。未知のお方なので、返事の出しようもないことだったが、私のことだから、そういうことを一発ぶつけておけば、折をみてそのテーマの雑文でもかくだろう、と踏んでのことかもしれない。

私という人間は、齢五十の坂にかかると、どこかのマンガの「いじわるじいさん」の如き症状を

っている。

作ろうと思えば、いつでも作れるのだが、その気がない以上作らない。だが柳友仲間とのハガキ程度のやりとりの場合は、一句で五行や十行の文句が節約になるので、ついでに加減な十七字をでっち上げてお茶をにごしているが……。

若いころの私は、ボンボン蒸気の丸い煙みたい息をするたびに句が噴き上った。青空に向ってだが、音の出た瞬間に跡形もなかった。作ることにモーションがつき、それが活字になることにより、ていよいよハッスルし、それが昂じると一かどの文句も覚えて、もつともらしく柳文を書きながら、おく面もなく大勢の人々を前にしやべりもした。だが今どきの若い連中と同じ姿、言葉つきの私なので、誰がきいてもそれですませてくれたようだ。

ところがだんだん月日がたち、句に飽き、あげ底の柳論に詰るとあてすっぽうの駄文の方が人が喜ぶようになった。そうか、そういう風なのかと私も納得するようにになると筆はますます気楽一方の方へ走った。

元来、私は柳誌の同人がキラリである。A級どころのこれは柳誌の語で、小さい地域グループやその連中が気散じに出す柳誌風

のものは別。いわば罪の意識が薄いせいだったかもしれない。今もそれでよかったのだと思っっている。

オレはどこそこの同人で、オレはその幹部だ。とよく口にする人がいまもむかしも絶えないことだが、それは結構として、私の鼻につくのはそうした同人がそうしたA級柳誌に毎月幾らかの句が並ぶことによって次第にエリート意識を強めていく傾向にあることだ。それによって実作の価値判断は後ろの方に置きざりになって、

酒

清



灘・魚崎

金露酒造株式会社釀

名前と年期待だけが先に走り出し、一かどの地域的グループの宗匠化していく。金と暇ができると当然のように柳誌を出し、排他的セクショナリズムのヨロイを深々と着ていく始末となる。

もつとも、こうした人々が十人が十人であるとは言わない。野に賢人ありである。中央の柳壇前でラチもなく年期待一つでノボホンと納りかえっている宗匠センセイより、もつと腕と頭のたしかな柳人が至るところで眼につく。こうした人たちは、一クセも二クセもあるの、ガタガタとラチもないことをやらない。唯我独尊で、気分本位、マスコミ的なムードをむしろ避けるようにしてコソコソとしぶとくやつていく。マイクウェーって奴である。リップであり、人なき里のお地蔵様のように清潔感さえ漂っている。

石原背竜刀さんは、俳句を仰ぎ見て足下に川柳を見出した夜明けの徳高山脈みたいな人だが、お陽様が上ると、風当りがきつくなって寒い山のてっぺんより、俗気のつよい麓の宿場の方が賑やかで気楽でいいと考えられるようになった。街道筋の緑日へ平手造酒が居合抜きをご披露する様に人眼に立ち、有名になった。お山の神サマの方はシャクナゲの花の手前、ちよいちよいお供えていどはやっていられるようだが、評判は人のたて込むところほど、にぎやかなコトになった。彼氏の俳詩はいわば、お山の神様へのテレ隠し、田舎作に居合抜きの手が判ってタマ

ルカの気持であった。これがスキサシならんことになったらしい。妙なところに平手青竜刀が赤ザヤの刀でとび出してきたが、私のイワンとするとところは、今となってはこれでよかったのだという気持で、この老剣客を人懐つく眺めている。人間底意が通うと、万事コトのはかものとなるのが世の中の情だが「キチガイがオレの言いたいことを言い」の句意が二十年経ってやっとわかったような形だ。

私は川柳なんてものはよくよく「中途半端なものだ」とこのごろ考えることしきりである。伝統川柳は金物屋の店先のモチ網や金ヒバシみたいなものだし、詩川柳といっても、結局は金屋製をプラスチック製品に換えたような気がする。こういう金物屋の人間どもが怒るかしらんが、結局こういうものは芸術というタイトルのそのスーパーマーケットにとっては、地下室か店の裏口の辺にしか並んでいない売り場の端っこが身分相応であると思われたわけだ。

こう思うと日用品は至極簡便で値が安く、誰にでも親しまれるけれども、しよせん消耗品であるという宿命をもっている。これはこれでいいのである。世のため、人のために役立っていて、なければ

川柳雑誌社特製
投句用 柳 箋
一冊（五〇枚綴）三〇円
送料（二冊分）二〇円

不自由だからである。製造元はかくそう信じるからこそトラックで、オートでどんどん小売店へ運びつけてくるのである。片っ端から売れ、そして一方からどんどんその商品は持ち込まれてくる。

私ははじめその店の小売人の一人であったが、輪をとり一品ずつの商売にもあき、次々と新製品がつづき、元値と小売のさばきにもうとくなつたので、自転車預りの方に回った。ここは気楽でいい。坐っていれば自転車はひとりでに入ってきてはひとりに出ていく。預り料金がタダだから、責任感が薄く肉体的な疲労感もない。

こんな気楽な稼業をしていて、なんで重い金具の束や、イモノの荷をいじる必要がある。第一、もう動くのが七面倒くさいのである。

閑居のムダ話は年寄りほど豊富で、でき方にも抵抗の少ないものはない。私自身そうきめつけはしているのだから世話はない。

*

★巻首に自序がある。少しく抜萃する。

「中村富二句集」をおくる。これは「富二が現在生きていること、尻尾の様なモノだ」と、お考え下されば俚せである。

ボクはいま色々な意味で、一時作句を休んで居る。でも人間を廃業する気は毛頭ない。何よりも愚かでありたいと考えているし、墓石が欠けてるように、前歯が欠けて来ても永遠に青年でありたいと、慙だけは誠に罪深いモノがある。

川柳という名に残されたモノは、技術だけである。という考え方は、当分変りそうもない。伝統作品が流れ作業だと言う議論が、そのまま一部現代川柳にも当てはまる危なさ、技術も貧困からだと言われるのが、ボクも或いはそうかも知れないと、自戒に似た気がする事であり。そんな瞬間は論争の外に佇んでいる。（以下略）

★目次。墓地（二一六句）少年抄（九五句）青（一二三句）童話（一五三句）

★一九八一年一月発行。B 6版九七頁。価二〇〇円東京都豊島区渠鴨六ノ一三三九森林書房発行。

★著者は現代川柳作家。伝統派から一步でも通れたいと苦しんでいる作家に一読をすすめる。そして果てしない苦しみを味わうことである。

万葉句集
わが家
金泉万葉著

★巻頭に著者の近影、次いで岸本水府氏の序がある。

★著者の自序によると大阪ガスを定年退職記念に「万葉句集」を舎密川柳会から、本句集は「折鶴」の七周年記念に刊行されたもの。本句は定年以後、還暦に至る晩年の作品の中から自選三百句。

★昭和三十四年四月十九日発行。B 6版四三頁。価百円。大阪市東住吉区田辺東ノ町五の一八、番傘折鶴川柳会。

★著者は柳梅の中から生れ出たような伝統派中での重鎮。

武玉川 一
（宮武）外骨編

★本書は慶紀逸撰の俳諧武玉川初篇及二篇（寛延三年版）の複製である。

★巻頭に、廃姓外骨氏が「俳諧武玉川の複製に就て」の一文を掲げられている。

★大正十三年九月一日発行（川柳叢書）定価一四。A 5半紙、和紙袋綴、一七八頁。発行所東京市下谷区上野桜木町二十二番地半狂堂。

晴窓川柳句集

★本書は傷痍軍人愛媛療養所晴窓川柳会の句集である。

★「真」「情」「美」塔と題して今は亡き前田五健氏が一文を草している。

★目次を挙げると御下賜菊花集、晴窓集、遺詠集。

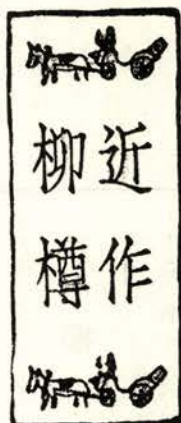
★昭和二十年七月一日発行B 6版四〇頁非売品発行所愛媛県温泉郡北吉井村傷痍軍人愛媛療養所。

句集 しろがね
川崎銀甲 著

★本句集の巻首に著者近影と序が掲げられている。

★昭和三十八年八月二十四日発行。A 5半紙版、定価百円（送料共）発行所、番傘えんびつ川柳社

★著者は福井番傘の創立者。



麻生路郎選
北川春巢選

百葉の長も免疫性となり 海取県 鈴木村 瀧子
 ボーナスの影法師まで歩調とり 同
 精神年令で少し力んでみたけれど 同
 諸方借り倒し上座に据えられる 同
 こんにやく よまゐる主義よ偽善者よ 同
 易々諸々君もお金のとりこなる 同
 こんな傘忘れてくほどホラを吹き 香取市 水谷 谷水
 旧婚旅行妻の記憶で歩かされ 同
 手手手手手うちの子 だけがまた上げず 同
 嬰鑠たる男で孫が寄りつかず 同
 蟹の泡ほどの消火器ふり廻し 同
 静養の正月でしたと如才なし 同
 糸切れたような女の横坐り 秋方市 宮川 珠笑
 スリッパの寄り添う部屋の続く宿 同

盲判投資案内読みふけり 同
 貧しさが金で買えない愛を説き 同
 テキストを読んで講演料を取り 同
 二次会の去った主賓を肴にし 同
 墓地移転させてビル建ちバーが建ち 新潟県市 安藤 桂仙
 不寝番つけた被告が高いびき 同
 感覚のずれと知りつついどなり 同
 落ちる葉と知らずみの虫ぶら下り 同
 たしなみを越えた化粧を哀れとも 同
 頭蓋開けても保守の血は血 兵庫県 常岡 孝風
 尼僧一人アベック多き坂下る 同
 株の穴埋め百姓の父頼る 同
 金は天下の回りも のくやしいタンカ切る 同
 春の音がする病衣の垢落す時 同
 金だけに頼る孤独を楽しめり 宮崎市 野口卯之助
 一本気では職人も立たぬ世の 同
 性格の違う親子が生きうつし 同
 チリ一つなくてなんだかくろげず 同
 枸杞飲んで齢はとりたくない ものよ 同
 こせこせこせ大物にもようならず 新潟県市 小林 孝正
 生活でない釣り一升瓶も乗せ 同
 白を白にする少年の眼がきれい 同

現代柳人録



(一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六)
 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九)
 自署の句一句 (一〇) 川柳以外の
 趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二)
 川柳に手を染めた年月

(234) 鹿島 一甫

(一) 鹿島金一郎 (二) 一甫 (三)
 (四) 東京都新宿区四谷二丁目一
 (五) 明治三十五年十一月三十日
 (六) 東京都芝 (七) 金物小売業
 (八) 四谷御〇三〇三 (九)
 雪山の素顔怒った母に似る (一〇)
 登山 (一一) 有 (一二) 大正九年頃

(233) 傍島 静馬

(一) 傍島静馬 (二) 静馬 (三)
 (四) 神戸市東灘区本山町森三九八 (五) 明治三十三年一月二日
 (六) 岐阜県大垣市 (七) 会社員
 (八) 吉屋 〇七三六四 (九) 長生きをしてねと母に子守させ (一〇)
 俳画、旅行、読書 (一一) 有 (一二) 昭和二十八年二月



ワイシャツの汚れへ妻をすすめられ	同	流行の型とかオシメバックにも	同	気持には輪をとらせぬ杖が要り	京都市 大久保 和二郎	血圧の薬はのんで止まぬ酒	同	父方の伯父へことばがあらたまり	同	背を撫でる声で阿呆と妻へ云う	同	死神と寝る亡命の夜の暗さ	福岡市 小田 無限	大いなるロマンも無しにマスを割る	同	風呂焚けばゴッホの炎百舌の啼く	同	放屁一発当分死ぬる音でなし	同	生字引社長夫人の過去も知り	岐阜市 日 東里	老いらくの恋を笑わぬ齢になり	同	新開地まずモーターがでんと建ち	同	書道展なのでこれをも字と思ひ	同	自らを叱って拳にはならず	玉島市 水粉 千翁	叱られてゐる激励を受けてゐる	同	また来るといって一番先に去に	同	春の日が初荷の高さからこぼれ	同	飲みつぶりまで頓狂なコメデア	大阪市 藤富 淀月	いいデートらしく豚まんじゅうみやげ	同	だるま軸年中掛けて田舎宿	同	スキー連泊める農婦も薄化粧	同
蜜柑提げて来た父只の用でなく	八幡浜市 芝田 霊子	三角の眼鏡ローズの爪光る	同	病床は問わずも葬儀委員長	同	君 君 と呼ばれ車道の松葉杖	同	わが道を行くと出世に遠い道	大洲市 横田 放人	先輩にカバン持たせた三次会	同	選挙からお得意様がちとかわり	同	大臣に聞かせるセリフ妻の愚痴	広島市 上代 美文	当り前の事しただけへ感謝状	同	人間の弱さ平和をもて余し	同	夕方に空巣どころか居て盗られ	大阪市 福富 隆子	モーニング借りた足にて式場へ	同	ボリーナスがは入りごみくず多くな	同	蜘蛛の巣に蜘蛛の姿が見えぬ冬	鳥取市 近藤 秋星	死にたくないかと酷い事を聞く	同	君は人妻賀状心の中に書き	同	二人三脚男の方がよくころび	ハワイ 斎藤 流路	病院の白さに咳に色があり	同	吊し柿小鳥は妻の留守にくる	同	倅せは孫に守りされ按摩され	高知県 山川 勝子	旅業し父子揃うてパチンコ屋	同	観光ブーム序に見合もして戻り	同

(236) 中村 薫

(一) 中村薫 (二) 九呂平 (三) 豊 (四) 下関市上新地六町二五〇

(七) 明治四十年七月二十三日 (六) 下関市新地町四五番地 (七) 交通公社嘱託 (八) (九) 掌

の煎子がうまいコップ酒 (一〇) 観劇、スポーツ (陸上)、将棋、

(一一) 有 (一二) 大正十四年頃

(237) 藤村 和子

(一) 藤村和子 (二) 少女 (三) (四) 大阪市住吉区我孫子町

二の三三 (五) 明治四十五年五月 二十三日 (六) 岡山県真庭郡勝山

町 (七) 保険会社セールス (八) 郵局七六八五 (九) 兄ちゃんと呼

んで遠慮のない夫婦 (一〇) 観物

味の味

モダン

川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL 四 6684

御集会には階上を御利用下さい





酒量にも番付があるわが職場 仙台市 平野 光道

雪のない正月今日もごみを焼き 同

敵もなく味方もなくてピエロ役 同

ラッシュ時の空想よろめき^{ドラマめき} 大阪市 西本 保夫

建設的意見が好きな管理職 同

大阪の空気へ出来ぬ深呼吸 同

人手不足の我家見捨てて娘のバイト^{バイト} 竹原市 杉原 愛鳩

幹事先ず一言居士へ相談し 同

悪運が栄え近所とつき合わず 同

文句たらたらモニター銭になり 静岡市 多々良英丹

妻と来れば無駄なるコピー店 同

この先に突当りあり公吏の座 同

奥さんへよろしく奥さんへ伝わらず 岡山県 秋野 萩路

老女だけ泣いて歌舞伎は終りけり 同

屠蘇飲んで暗い株価へ目をつむる 同

ハイティーンの足は和服が^{まといつき} 竹原市 大淵大八洲

丹前になって裏切る腹を決め 同

室番で呼ばれて忙し旅の宿 同

少年A夫婦取りでB子連れ 堺市 青山慶之助

類焼を気ずかう火事が記事に出ず 同

手配書は僕よりぐんといいい男 同

禁酒した今年も同じ穴があき 岡山県 永宗 宗義

雑煮餅メモを取ってる子沢山 同

春着買うプランにボーナスついて来ず 同

大小屋を五輪までにと孫せがみ 笠岡市 谷本鈍愚坊

冥土への旅に遅れて目出度がり 同

木枯しの河原に砂利取る人の居て 同

年の暮賽銭箱も掃除する 大阪市 山田 李鳥

吊り皮のゆれて見下ろす髪の出来 同

口紅の付いたすいがら妻の客 同

のろのろと絶対多数の挙手をする 松原市 守屋 万竿

商魂は無料でかゆいとこをかき 同

歌も絵もママの願いに遠い子等 同

人見知りして初泣きの子をほめる 西原市 里田一十

面会殺到大ものらしいドック入り 同

それぞれの患者にそれぞれ女房来る 同

拾う神ありパンの道つづく 大阪市 林 緋砂子

マネキンのつもりで歩く晴着なり 同

特価品女をこんなに強くする 堺市 高寺 和郎

神代から貧乏だったらしわが家系 同

正月のプラン半分ほど残り 大阪市 坂川 有子

似合わぬと云えば彼氏の好みにて 同

いかの値を声高にきく七尾線 羽咋市 三宅 ろ亭

冬垣へ雪のないのが淋しすぎ 同

旅行、詩(一一)無(一二)昭和三十年

(238) 藤岡花梢

(一) 藤岸友子(二) 花梢(三)

(四) 富田林市毛人谷五〇〇

(五) 明治四十一年三月十四日

(六) 大阪市西区堀江(七) 無職

(八) 富田林二〇一九(九) 先客

の一寸気になる男靴(一〇) 園芸

旅行(一一) 無(一二) 昭和三十

五年十月

(239) 浜野奇童

(一) 浜野基(二) 奇童(三)

(四) 岡山県久米郡久米南町下

弓削一〇三九(五) 昭和三年七月

一日(六) 岡山県久米郡久米南町

北庄二九一四(七) 教員(八)

一(九) 大砂丘へ立つ人の何と小

さき(一〇) 謡曲(一一) 有(二

二) 昭和二十五年五月

(240) 榎本聰夢

(一) 榎本靖(二) 聰夢(三)

(四) 宇塚市仁川公務員住宅七

五号(五) 明治四十年九月二十四

日(六) 東京(七) 国家公務員

(八) 一(九) 叱られるとこま

で見える総ガラス(一〇) 俳句、

スポーツ(観戦)(一一) 有(一二

) 昭和十三年始



ゆっくりと寝たを喜ぶ里帰り	同	伊丹市	伊丹柳瓢子
正月も師走も山門外のこと	京都府	西村句楽坊	同
墨染めでお雑煮だけの気安さ	同	吉田 博一	利男
クルマあるひとの真似薄着流行	八尾市	稲本 凡子	和泉 松風
なにを隠そう子持 ちのあひと 好き き でした	同	逢うて来た余情へしばし眼を つむり	同
よろめきを見抜かれそうな聴診器	羽曳野市	小説の種にされてるすれ違い	同
酔客の心にしみる新春の雨	同	掌に小さな幸を抱いて生き	同
力道の急死へ妻も意見出し	富毛市	流れ雲一つ離れて何処へ行く	同
もののいいではし一つが与えられ	同	温泉郷添景人物にと撮られ	同
新教育かくも理屈をいわしむる	大阪市	家族皆の自転車四台陽に並ぶ	同
晴着ぞろぞろ自己満足が街をねり	同	デートする嬉しさ車窓みなきれい	同
妻外出免許とらせて後悔し	香川県	植木買うゆとり団地の陽に生き	同
乙姫の私生活までない絵本	伊丹市	悔のこす日記も閉じて除夜の鐘	同
砂あそび六甲だよと盛っている	同	里帰り茶菓子が出ると他人めき	同
予告して来る豪雪へ手が打てず	七尾市	泣きもせずあやまり もせぬ 子に育ち	同
見え透いた嘘も嬉しく嫁ぎ行く	同	お蒲団の四隅押える母の愛	同
向い風ベタルに節をつけて踏み	松江市	口惜しさを飲込んでいる目 つきを	同
交際費慶と弔とがもつれ合い	同	親馬鹿の朝早くから病院へ	同
炭背負い新正月にあちら向	石川県	香水のバラが鼻つく満員車	同
老いてから合点するのも論語なり	同	重いわと文金島田卓に置き	同
恩給の増額新聞読みなおし	兵庫県	商魂は師走の空から声となり	同
交通事故よそに団体派手に立ち	同	おみくじを引いて見たい嬉しい日	同
		中古車を新品でつかとお世辞云い	同

(241) 岩井三窓

(一) 岩井光夫 (二) 三窓 (三)

(四) 豊中市桜塚元町二丁目

一三三 (五) 大正十年十月二十九

日 (六) 大阪市西区堀江 (七) 会

社員 (八) (九) 綴方貧しき

父は母を打つ (一〇) 読書 (一

二) 有 (二二) 昭和十六年

(242) 林 宏子

(一) 林花子 (二) 宏子 (三) 絆

砂子 (四) 大阪市住吉区万代東五

丁目八 (五) 明治四十五年一月十

日 (六) 大阪市浪速区新川三丁目

(七) 川柳雑誌社 (八) (九)

雑魚の方が幸福に暮してた (十)

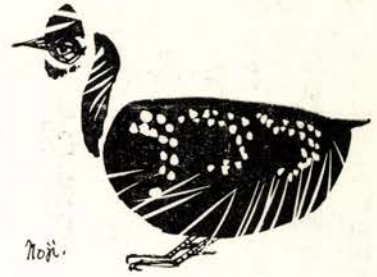
読書 (一一) 無 (一二) 昭和三十

二年

肩こり・神経痛
筋肉痛・腰痛
寝れ目・便秘に
●アリナミン
●無臭性アリナミンF

「タケ強」の活性持続型ビタミン

疲れ！アリナミン®



大野風柳の人と

作品を語る

藤井比呂夢

本名、大野英雄。昭和三年一月

六日、新潟県新津市に生る。昭和十八年、旧制中学四年の頃から川柳を作りはじめ、同級会誌などに発表したのがはじめて、以後、昭和二十三年、長岡工業専門学校応用化学科を卒業する間、昭和十九年六月、二十年八月迄、学徒動員先の機関誌に作品を発表、昭和二十一年頃には、別府番傘の「川柳文化」に投句を続けていた。昭和二十三年四月、北越製紙株式会社に入社現在に至る。

昭和二十一年頃から「にいがた文化」「月刊にいがた」「夕刊にいがた」等の川柳欄に活躍。同二十三年秋、古川柳研究家で知られている新潟大学教授阿達義雄先生と計って、月刊柳都の発行、柳都川柳会の結成に決意。
昭和二十四年一月からプリントながら「柳都」創刊号を発行した。その時の会員は三十名。主幹

として以後、「新潟川柳社」と改め、今日に至っているのである。

現在、読売時事川柳、新潟刑務所すがた川柳、国立、内野及び有明療養所、盛鉄川柳（盛岡）の雑誌の選を担当している。

この外、昨年度まで二年間、国鉄文化の川柳選者であった。

以上が私の知る範囲の履歴のあらましである。

現在「柳都」に「柳誌を斬る」を書いていますが、これを終えたら主幹大野風柳の鑑賞を考えていた矢先、川柳雑誌社より一足先きにこのことが実現するとは意外という外はないのである。

新潟が川柳不毛の地と言われた汚名を返上して十七年、現在、全国十誌のなかに「柳都」がはい

るまでに至った事実、主幹大野風柳の川柳に対する情熱以外に考えられない。柳都創刊以来ともに歩んで来た偽らぬ気持である。

主幹が師であり、先生であることとでなしに柳友として語ることが出来るのは、人柄の故と語っている。

初対面は夕刊にいがた主幹による川柳愛好者の座談会であった。

そのときの主幹は二十才私は二十一才と、ともに若さ充分であったのである。

何と言っても大野風柳を語るポイントとなるものは、昭和三十六年に刊行された「浄机亭句、論集」であろう。

川上三太郎の「蒼蒼亭」、麻生路郎の「不朽洞」のごとく、大野風柳が「浄机亭」と発表している

老成した印象を与えていたのは好ましくない。特にこの句論集が「浄机亭」を名乗った点の意図が

一体どこにあったのか。「大野風柳句論集」のはうがスッキリして

川柳作家らしいと常々おもっているのである。

さて句論集だが、昭和二十四年より同三十六年までの作品四五四句が収録されている外に、「柳都」誌上や他柳誌に発表したものの、大会等に講演した二十三題に亘るエッセイ、時評、柳話が収録されている。先ず作品から、

昭和二十四年
インフレを組みみしている香具師のひざ
クレヨン画いつも煙は右へのび
白米のお握り菓子のように見え
二三切れ小さい皿の出た家風
働いて番茶がうまい日本人

昭和二十九年
ヒヨコボツんと買出のついた箱の中
終列車妻にすまないことばかり
親馬鹿の子供へ知能ついでいず
将来のない人生の乳バンド
貧相と言われて笑い返すのみ

昭和三十五年
雪国の子供地酒の味を知り
四Bで面白いのししが動き出し
雪つづて命中笑いがとまらない
ついて来るヒヨコを蹴ることも
出来ず

素人のうちは人情主義者なり
神様のお札安いからいいだろう
ねずみ三匹三角形を保ちつつ
演技貧しスキーの塗りがはげか
かり

墓の美に心打たれて人臭し
皇孫が生れヒロヒト頂点にもど
り
沈下都市ヒステリックな笑いが
句論集より十余年にわたる風柳

作品を、初期、中期、後期に分類して言われることは一貫して平易な作品であることだ。
一箇の平凡な市井人としてのプロフィールをそこに見ることが出来るからである。

柳都とともにわき見をせず、真一文字に、作家として、或は、編集者として、めまぐるしい十余年であつたろうし、孤軍奮闘してきた手腕は評価するけれど、感情、思念の誇張を避けたその底に流れる風柳作品の、反逆、否定、被虐の効果、印象、生命感というもの、が、作品構成のなかに盛りあがって来ず、一見、無器用と思われるくらいに緩慢なタッチは、苦痛の比重が、どれも軽く、空転しているからである。

平明な表現が大野風柳の武器（個性）かも知れない。しかし、内容まで稀薄に流れては、その稀薄さに鑑賞者は帽子をぬがざるを得ない。

風柳その人の心象を簡単に受理出来てしまう物足らなさが多分に残るのである。

神様のお札安いからいいだろう貧相と言われて笑い返すのみ終列車妻にすまないことばかりこの三句など、いずれも諦観主義的傾向を示し、低調な庶民性を露出している。こうした感動、衝動の弱い、内在性の低い時点での発想は、表現も古しい、作者の顔、つまり表情のない結果があら

るからである。

われているといつてよい。

比較的にこれら三句の如き傾向が、句集の大半を占有し、伝統派作家としての大野風柳をそこに置くことが出来る。即ち「穿ち」

「軽味」「おかしみ」に重点をおいた微妙な人間の動態、心理を軽妙に詠いあげているのである。

墓の美に心打たれて人見し
皇孫が生れヒロヒト頂点にもどる

り
注下都市ヒステリックな笑いぶり

しかし、この三句に見られる（昭和三十六年）社会批判、資本主義への反抗を強調した一庶民の姿の浮きよりは忘すれてならない。第一句は座五の断定が甘いけれど、風柳自身の人間観視がある。第二句は観念的であるが、常識川柳だけでない現実認識の深さを社会批判として詠っている。第三句は客観的な直截が注下都市をコミックに表現して成功している。

句論集のなかの、妻を詠った十二作品

熱い鍋妻悠々と持ち運び

雪と雨妻もぶつづつ言ってくれ

雨の聖妻がいそうな気で降りる

言訳をするにまごつく妻でよし

本当の笑い妻子をみぎひだり

良妻に希望を聞けば瘦せ葉

スナップをとりたい程に笑う妻

むつりとした妻こんな顔にな

不遇かと聞けば静かに妻笑う

太る妻を笑いビタリと意気が合

い
汽車で眠る妻をしずかにしてお

こ
肥満型は母さん似だと聞き飽き

る
さほど肥満型とは言えない奥さ

んへの愛情が、ふつふつと湧いて

来る印象は、この十二作品のどれ

にも言えて、夫婦愛の結実を示し、

うらやましい限りと言えよう。

句論集の論の方では、

川柳非詩論に対する一考察、

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

（昭和二十五年）

在を認めている。伝統は我々がつ

くって行かねばならない。僕の最

も嫌うのは、伝統の語に甘んじて

所謂、既成品のくり返しである。

そうかと言って現在の革新派は地

に足がついていないので賛成出来

ない。しかし、現在の川柳は塗り

かえてゆかねばいけないと思う」

× ×

柳都の作家は年令的にも若さが

みなぎっている。だから主幹の主

張をそのまま無批判にせず、自

己・自然・社会を凝視しつつ、川

柳短詩への開拓にこころしている

もの、伝統川柳への抵抗意識が類

似性を拒否して「作家的自覚」の

たかまりが見えるのは当然かと思

われる。

「現在の革新派は地に足がついて

いないので賛成出来ない」とする

主幹の主張は、具体性がなく舌足

らずという外はない。

今日の多彩な川柳の諸傾向の伸

展は、表現形式と内容が作家の自

主性をもった創作態度によって決

められるもので、主幹の主張にふ

柳・本格川柳を、それぞれ主知川

柳・感動川柳として説明をつづけ

主知川柳も感動川柳も唯一の大き

い目標へ向っている。それは文学

と呼ばれる明光を放っている燈台

なのである。知性のひらめきであ

ろうと人間性の真髄に触れた感動

の閃めきであろうと愛人のささい

な微笑にも敏感に感ずる鋭い感覚

性を適所に応用してゆきたい。要

は頭脳の閃めきの練磨養成であろ

う」と、生活の片隅しか詠えぬよ

うな川柳から一歩進んで、新しい

対象・感覚・意識を駆使して明日

の川柳を詠てゆくことを述べて

いる。

又 石原青竜刀の言う「川柳非

詩論」に対しても堂々と論争をこ

ころみた、「川柳非詩論に対する

一考察」に於て「笑いから見た川

柳」にしろ、時評の「抵抗の存

在」にしろ、「何を詠うべきか」

という川柳創造の命題に対して論

理的究明を行っている。――のだ

が、著者風柳自身の「あとがき」

には、

しくはないだろう」と、率直に自

己監視を行っていることは、柳都

をひっぱってゆく機関車の姿であ

る。

ただ、もうひとつつけくわえた

いは、理論と作品が往々にして

マッチせず、作品構成の上に類型

的な古さが表現されていること、

冒頭の作品評に述べた通り、「三

要素的」句の作品が多く、生命

感の深さ、作品の持つ重量感のな

さがもの足らないのである。

ちなみに最近の柳都から引例し

てみよう。

（昭和三十八年十二月号）（巻頭作品）

めんちようの貌をつき出す妻の

前

めんちようのすでにてのひらから

あふれ

めんちようの側のふくれがかわ

いらし

めんちようをじろじろと見る十

八九

めんちようにマスクその上風邪

をひき

（昭和三十九年二月号）（巻頭作品）

見おろしたときの貌なり風の竜

（昭和三十九年二月号）（巻頭作品）

雪のない佐渡ヶ島また水の色

雪のない道で牛乳屋がころび

二度までもアクビ重なるおもし

ろさ

愛鳥家の口笛歌謡曲でなし

通勤車ならスピーカーなどいら

ぬ

以上の十一作品を鑑賞して言え

ることは、鑑賞する人・思想・環

境等によって、その観方がいちち

るしく異なることは今更言うまで

裏口へ近所始うるさすぎ 阿茶
 裏口のきかぬ大学出た誇り 同
 裏口のみいりて小さな家を建て 同
 裏口で使う言葉が荒くなり 同
 当選を裏口からも祝いに来 同
 売れっ娘の母裏口で乳が張り 同
 裏口へ晩白泥こんで戻り 同
 預金なら通す裏口あけてくれ 同
 裏口へ来ればホステスマになり 同
 裏口へまわれれば猫も顔なじみ 同
 裏口で御用聞きとの恋も咲き 同
 裏口で会うては悪い人に会い 同
 裏口は女中立聞きするところ 同
 裏口も無い家かいなと母あきれ 同
 裏口の壁が落ちてる母子家庭 同
 裏口は護摩木をたのむ女連れ 同
 裏口は忙しそうな下駄を脱ぎ 同
 帰りせく裏口の鍵釘一つ 同
 裏口で誰を待つやら頬かむり 同
 裏口は出入りはげしい芽出たい日 同
 裏口で吠えられデパートあきらめる 同
 あの社長裏口入学だったけど 同
 御用聞き裏口のぞいてよおかせぎ 同
 裏口営業片目をつむる署長殿 同
 孫つれて裏から帰る家出の娘 同
 裏口が気になり出したスリラ読む 同
 裏口に買収される酒屋き 同
 しお時と社長裏口から逃れ 同
 わびしさはネオンの裏で妻を待つ 同
 裏口へ親指出して来てまっせ 同
 裏口で女中の恋が実ってた 同
 裏口の客に教師は苦勞をし 同
 裏口のやぶれバケツに花そだて 同
 裏口の方がきやすい魚屋さん 同
 裏口の交渉ボスの顔がきき 同
 堀口の収入本給うわまわり 同

もないが、「めんちょう」の句など、作品の生れ出た根拠の平板さ、モチーフの追求不足である。そして、「雪のない佐渡」「愛鳥家」「通勤車」の句に於て、生活を根柢にした気魄がまるでない。人間感情を感情的に描いているので、発想の動機の時点の低さが致命的であろう。

裏をかえして言うならば本年一月号の「川柳岩手」で書いている「伝統尊重」の精神が、大野風柳そのものを表現しているのである。「一生煮えの伝統主義と、薄っぺらの近代主義から芸術を奪回しよう」と、岡本太郎は言っている。伝統と革新の対立は、あらゆる舞台において闘っているが、この岡本太郎の言葉は、その両者の間みを見事についていると思う。

川柳界に於ても、昨年頃から再び伝統川柳を理解しようとする傾向が、ありあろうかがある。江端良三・山村祐らの力説しているものを噛みしめて見ると、川柳の伝統性を尊重していることに気付く。ひと頃は、感覚に頼り切る作品、それをもてはやす柳論が風びしたものが、今年もおそらく川柳の伝統性について、まじめに話し合つてゆくに違いない。ただ一言、私がつけ加えたいのは、伝統に「日本」があるだけで「現代」が無いような作品は断固として阻止して行きたいことである」と。

すでに紙数がつきた。ここで最

後に述べたいことは、国鉄川柳人連盟と大野風柳との関係である。新鉄川柳サークル第三回大会で句集発刊の討議を行った処、全国鉄の横のつながりを持つとうじやないかという機運が昂まり、句集発刊と同時に、一つ実践し、本当に行動に移さねばならぬという結論が出、新鉄を軸に東鉄・仙鉄・長鉄・大鉄・高鉄と、各作家の協力を得て、今日の国鉄川柳人連盟が生れたのである。

この仕事を支援し、はげましたえず眼をかけてくれ、機関誌の編集・選句・句集の刊行等に風柳主幹の指導がなかったら、四百余名の大世帯である連盟とならなかったのではないか。一つ釜の飯を喰った親愛感、それが私の偽らぬ風柳観である。

日数がなかったことと、川柳にいがたの編集等に追われたため、まことに粗雑な結果となった。しかし、おべんちゃらのない気持でペンを握ったことを附記しておく。(終)

新聞と時事吟

不死鳥

新聞が時事吟を募集するのはいいが川柳になっているのは雨夜の星ぐらいで、選者泣かせに過ぎない。一般から募集するより選者に作らせたらどんなものであろう。昔、大正日日新聞で、半文銭が素晴らしい時事吟を発表したことがあるが、新聞へ投句するアマチ

ユア川柳人にそんな放れワザは出来っこない。私も大阪新聞で二カ年間、山陽新聞で三カ年ほど、毎日放送で半カ年余り時事式のものを作らされたことがあるが、予想外にむずかしいものだ。

締切りまぎわの時事では、事件の予測までして作らねばニュース性を失うので、作家であり記者である素質のあるものでなければ素晴らしい作品は出来ないとと思う。すくなくとも横山泰三氏の社会戯評を向うに廻わして闘うほどの時事吟でなければ、時事吟としての価値はないのである。

ある新聞記者が自分の社の新聞の時事を見て、こんなのが川柳ですかと、ついでに川柳まで軽蔑していたが、尤もだと思ふ。



コクヨ
便箋





秋色女

富士野鞍馬

井戸ばたの桜あぶなし酒の酔
この発句は、元禄のころ上

野寛永寺、清水堂の東寄右手
の古井戸の側の大般若という
桜の木を見て、小網町の菓子
屋の娘、十三才のおあきが詠
んだと伝えられている。恐ら
く花見のころであつたろう。

これが輪王寺の宮様の御感に
預かつて、後におあきは俳人
「秋色」として有名になった
ので、この桜を「秋色桜」と
呼ぶようになったといわれて
いる。今在るのはその五代目
で、昭和五年に植え継がれた
ものである。そして昭和十五
年に碑が建てられた。

この伝説には、柳亭種彦は
じめ五六の異説があるが、川
柳は前述の説をうけて、いろ
いろおもしろく作られてい
る。

井戸端の桜でお秋名が高し

十三の春十七の名を残し

(二九)

と、十三才を「あぶない年」と
いつている。

秋色女の十三才は、寛文九
年(一六六九)生れであるか
ら天和元年(一六八一)とい
うことになる。俗説の元禄よ
り前になる。そのころの清水
堂は摺鉢山に在り、今の所へ
移されたのは元禄十一年(一
六九八)であるから、そこに
時代のくいちがいがあつた。そ
れで、この秋色桜は、享保の
ころ(一七一六〜一七三六)清水
堂へ奉納の意味で、秋色女が
植えた桜を「秋色桜」と呼ぶ
ようになり、伝説の「井戸ば
たの桜あぶなし酒の酔」とい
う句がこしらえられたと見る
のが妥当のようである。

秋色が店に落雁きぬた巻

(タ一二〇)

と、菓子屋が詠まれてあるよう
に、秋色女は、小網町の、伊
勢大塚の称を許されていた
老舗の菓子屋の娘で、小川あ
きといった。幼少から晋其角
の門人となり、同門の寒玉と
結婚して、古手屋、けんどん
屋を営んでいたが、菊后亭と
号して、夫と共に俳諧道にい
そしみ、師其角から、「半面

美人」の点印を付属せられ、
その正統を嗣いだのである。
また長男は林鳥、次男は紫万
と号し、一家あげて俳人であ
つた。そして、享保十年(一
七二五)四月十五日、
見し夢のさめても色の杜若
という辞世を遺して、五十
七才でこの世を去つた。

スモッグの街より

不死鳥

誰が持つて来たのか私の机の上
にマツチの空いたのが転がって
いる。片面に次の文字が読まれる。
大阪を美しくする運動

Osaka

裏を返すと、

みんなの町を

自分の家のように きれいにノ
散らかさない・紙クズ・吸ガラ
吐きちらさない・タン・ツバ・ガム
備えよう……ふたのあるゴミ箱
やめよう・空地や川への捨てゴミ
美しく整理を……ポスター・看板
なくそう……ばい煙・騒音・汚水
植えよう・育てよう・花とみどり
それぞれの家で 家の前を
掃きまじよう

と書かれてある。これをウラ返
すと、いかに大阪が汚れない街に
なったかを思わせられるのであ
る。

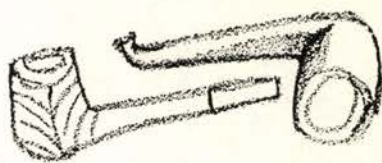
私は庶民的な大阪が好きで、水
年住んでいるが、スモッグに、交
通マヒ、道頓堀川の汚水、それ
どころからわぬ犬の糞には閉口し
ている。と、云って、近ごろでは
簡単に引越しも出来ない。

都市としては仙台や松江や松山
ぐらいが理想的だと思いがどんな
ものであろう。

私としてはいつも青空の見える
街であって欲しい。

夢虹の句に、

空と水汚たのうしてて文化都市



隨筆

金に繋がる話

「金に繋がる話」は曾て蓬萊ニュースに連載された隨筆だが、その続稿を本誌に執筆されることになったので、一応旧稿から一愛読を願うことにした。

(編集局)

麻生路郎

(三)

鞍前のことである。鳴尾の郵便局の親爺、イヤ局長さんが窓口で金を受け取るのに、五十銭銀貨を一つ一つ裏返して見、透かして見、机の上に投げつけて、その音を聞いていた。従って執務振りのスローなことときたらおそろく天下一という評判があった。

この老人の局長さん今までに、にせ金をつかまされた苦がい経験から、そうした慎重ぶりになった

のかも知れないが、一寸常識はなれの金の扱い方であった。世間ではいんごう親爺のように言われていたが、話して見ると、そんなに悪い人ではなかった。それに小さな植木鉢に小さな植木を植え、そ

れに大きな果実を生らせる特技をもっていた。あんなにして作ったものを三越へ売りつけて金儲けをしているんだと悪口を言われていたが、それは何処までも彼の趣味で作っているのだと私は解している。と、いう訳は、彼が五十銭銀貨を机の上に、何遍も何遍も投げつけて、音を聞いている時の眼つきと、小さな植木鉢に大きな果実を生らせて自慢そうに眺めている時の眼つきとは、全く別人の観があったからである。

一寸した金でも、持主によってはその扱い方が非常に違ふものであることは、ポケットに裸のまま無造作に放り込む人と、裏口をパチンと音させてしまい込む人と、財布を持たないのか、いつまで

のかと思えば、そうでもなさそうだ。うちでは、よく裏口の置き場を忘れて、「アラどこへ置いたんやろ、おばあちゃん知らん？」と探がしまくっているのを見かけると、「お金は大事にするんだよ」と、言うとき、「アラ、中みは、もうないんだけど」と、すましている。

豆萩という川柳家が

腹工合わるし大金持たされて
という句を作っている。地方へ集金に行つて、現金で支払いをうけたのであろう。銀行へ放り込むという方法もないことはないが、時間の都合では、そのまま夜行に乗り込んだとすれば、この句のような場合もある。

これは明治時代のことであるが、東京支店から大阪の本店へ十二月も押し迫つてから送金するの丁稚の腹に、胴巻に入れた現金を括りつけて夜行列車に乗せたことがあった。その当時としてはそれが一番早い現金送金の方法であったが、眠つてもいいが、決して腹へ眼をやつたり、手で押さえて見たりするのではないよと、コンコンと言ひ聞かせて汽車に乗せたものであった。今の時代でも、現金輸送はいろんな方法で行なわれているには違ひないが、正直者は腹工合が悪くなるに違ひない。

少々腹工合が悪くなつてもいいから、大金を持って見たいという人がいるかも知れぬが、しかし金持ちというものは案外、金を持つて歩るかないものだ。そこから何か買つても届けてもらつて支払いはあとからである。料亭へ行つても、チップまで帳付けである。それでいて結構ペコペコお辞儀をしてもらえるのだ。その点、貧乏人はそうはいかぬ。タバコ一つ買うのにも現金がいる。だからどこへ行くにも先ずお金を持つてゆくことを忘れない。持つて行く金のない時には浮かぬ顔をしているのが常だ。

経済学にグレシヤムの法則というのがあるが、法則といったところで、そうむずかしいものばかりではない。悪貨は良貨を駆逐するという、この法則などは考えようによってはなかなかユーモア味がある。

一寸買物をする。お代を支払うのに、綺麗な札はハネのけておいて、汚い札ばかり選んで渡す。これがグレシヤムの法則なのである。綺麗な札は死蔵されて、貨幣の役目を果たさないが、汚い札の方は、綺麗な札をハネのけて、貨幣の役目をするので悪貨は良貨を駆逐するといふのだ。この法則は貨幣だけに限ったことではない。人

間と人間との間にも、このグレンシヤムの法則が行なわれていることを発見する。

常識で考えりゃ、二三分で判断の下だせる問題でも、何日もかかって、揉みに揉んでいる政治屋は、何れも悪貨であることに間違いない。日本には立派な総理になれる人の一人や二人いない筈がないのに総理一人がいままで選ばれないので、空白政治を続けているのは、悪貨が良貨を駆逐しているに外ならない。

(四)

紀勢線のある駅で汽車弁を買った。フタをとって見ると、折りの中央に握り飯、その左右にいろいろならんなおかずがゴチャゴチャとならべられていた。一寸披露して見ると、昆布巻、卵焼き、かまぼこ、ハム、塩こぶ、十六豆、肉、ごぼう、八幡巻、時雨はまぐり、フライ、いかの佃煮、そこへ、沢庵が二タ切れと、雑神漬が少々そえてある。これで一〇〇円である。

満足をお願いより方法がない。そこで、アレも入れて置こう、コレも入れて置こうというところから、こんなに多くの品数になったのであると思う。商売というのはなかなかつらいものだと思っただ。

しかし、これだけ取り揃えて一〇〇円であるから、それぞれの量のすくないことは想像にたぐないであろう。何れも一口で片づくものばかりだ。では、味はどうかという、まずくて食えないというしろものでないから不思議だ。尤も汽車に揺られての旅は幸外腹が空くものであると、コレしかないという覚悟も出来ているから、相当の食道業の人でも、余り不平もいわずに、ムシヤムシヤ喰べているから妙である。中には駅弁趣味の人もいて、駅弁は何処の駅のがよしいから、そこで買うようになさいと注意して呉れる親切な人もいる。しかし駅弁を買う人のみんなが皆、必ずしも、味わって喰べてる訳ではない。他人が買うから買うという雷同派もいるであろうし、喋り散らしながら、喰べたので、何を食ったのか判らないという人もいるのに違いない。そうかと思うと、景色に気を取られている間に、喰べ終わる人もいるし、駅弁はどうでもいいが、駅弁の包装紙を蒐集するとい

うマニヤもいるのである。喰べたり、蒐集したり、斯うなると一〇〇円の弁当も安いものだといわねばなるまい。

私は名所や、景色には余り興味がないから神社や寺院へ行っても決して拝がまない。どんな神さんでも仏さんでも、おがんでおけば損はなからうという気にはなれない。おがまなくらいだから賽銭箱があっても賽銭を投げ入れたためしはない。

しかし、今のところ、私は無神論者でもないし、有神論者でもない。仕事之余にも忙しいので、その方へ興味を持てないのだ。だから、同行者があって、神社や寺院を訪ねることがあっても、私はそこへ立って、人生探求をしているに過ぎない。

眺望がよすぎ賽銭わすれられ

(花村)

という川柳をフット思ひ出したりして、なかなか巧くつかんでいるとそんなことを考えているのだ。ここでも、私としては見晴しのよいために、神社に尻を向けて、賽銭を投げることを忘れていてという人の心理を面白く興味深く感じるのであって、見晴らしが良いというそのことには大して興味は持てないのである。尤も全然景色には無関心だという訳ではないが、人

間が主であって自然は従であるというのだ。こんどの南紀の旅でも、熊野の那智大社の石段のところまで行ったが、石段を見上げただけで神社の建物は絵葉書で想像し、その食堂でビールを飲んで引き返してしまつた。コレで新宮からハイヤー代を三〇〇〇円近く払ったんだから、バカ気た散財だといえばいいないことはなからう。私にとっては森厳な神社よりも、温泉の岩風呂や露天風呂の方がズット人間味があって親しみ深いのである。

私はいつも思うことであるが、誰が考えたのか知らないが、うどんなでも、井でも、寿司でも、その一人前の分量である。特に大食の人でない限り、とにかく一人前を喰べると大いの人人は満腹するからおかしい。一人前の値段は、家によって物によって、非常に高低

があるのに、どの一人前喰べても胃袋をある程度満足させて呉れるので面白く感ずるのだ。それでいて料理屋やホテルなどで、幾皿かの定食を出されても、私たちの胃袋は、それ等の料理を一つ、残さず平気で平らげる。これ等全部の料理も又一人前であるから面白いではないか。

斯う考えて来ると一人前というのは実に融通無碍伸縮自在であ

ることに気づくのである。

近ごろ特に眼立つのは、おばあさんが俗にいうハイカラになったことである。以前は決して四つ足は喰べない。洋食はきらいで押し通していたものだ。たまたまライスカレーを喰べても、ボーイさんお箸を貸して頂戴といって椅子の上に着金と坐って喰べているのを見かけたものだが、近ごろはそんなおばあさんがいなくなった。たばこも刻みでなくシガレットをスパスバ喫うし、ビールもジョッキであおっている。映画でも音楽会でも、舞踏会でも、実に多くのおばあさんを見かける。お寺詣りよりも、その方がズット楽しそうだ。これも時代かなアと感心させられる

つづく





入門
講座

研究題「肩」

清水白柳

肩という課題は作り易かったのか、いい句が多くあったので楽しく拝見させて頂いた。

1 肩に手をかけて俸せそうなる

2 この世では実らぬ恋の肩並べ

3 その肩をたたいて恋人ふりむかせ

4 肩ふれしこともあり華燭のしらせ受く

1の句は素直な読み方で好感のもてる作品である。殊に俸せそうなど感じた作者の意志が充分に現わされていると思う。2の句はこの世ではという悲恋を詠んでいるのだが、下五の肩並べに少し描写不足を感じたが、このままでもいいだろう。3の句は、たたいてをたたきすると字余りにならないのだが、たたきでは矢張り強すぎるようなので原句のままの方がよ

写していったのもしい句といえる。

肩で風書生闊歩も地を掃い

繁太郎

肩で風切って下さいこのモ

有子

書生の句は作者が非常に苦心されたと思うのだが地を掃いは少し難解な句語になっているのではな

いかと案じられるのである。モ

ードの句は作者の自信、句の自信ではなく仕立られた作品への自信が

この句を生んだのであろうと思

た。

理髪料値上げすまなさそう

光道

この句は三字程字余りになって

いる。このままでも差支えないの

だが理髪料の料を除いて理髪値上

げとすると一字余りになるのでそ

の方がいいのではないかと思

う。句意はそれでも充分に判ると思

道。肩疲れてダンブ落っこ

万竿

とし

くという作者の感じがそのまま共感と呼んだのである。

肩の荷がおりた伴に嫁貰い

K

肩の荷をおろしめつきり妻

宗義

肩の荷が下りたら医者が待

滋雀

って居り

肩の荷がおりた様なり脱稿

弘村

す

伴に嫁をもらったので肩の荷が

おりたというのでは説明だけにす

ぎないのでそのことを肩の荷がお

りたという句語にふくませて、句

想を払げると、妻がめつきり老け

たという詠歎になり、また医者通

いをしなくてはならない程弱った

という句になったのである。医者

が待つて居りという句語は微笑を

誘うてくれたたのしい。脱稿す

の句は私にくださった句として有

が来る

和三郎

肩を肩であやす男の乱暴な

肩車すれば右行け左行け

M

肩車耳をひっぱる子に困り

肩車子だけ見ている猿廻し

勝子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

肩車のまんますませる初詣
で 八九寸

恋人の弟と親し肩車

光道

肩車の子どもへ日本間低く
過ぎる 保夫

子供にっこの句は、肩越しに
ツマ立の句の作者と同じだがこの
句にも同じことが言えると思う。

肩であやすという句は下五の乱暴
なと作者が感じたので救われてい
るのである。右行け左行けは具体
的に言っているのがハッキリ
している。耳を引張る句と猿廻し
の句は句として出来ているのだが
いままでに余りにも詠み古されて
いるので困った。併し作者がこう
した過程を経て成長してゆくので
あるからその意味で頂いた。初詣
での句はよくその情景が描き出さ
れていて心をひかれた。恋人の弟
の句はほほえましい句境である。
将を得んとすれば先ず馬を射よと
ある。日本間の句は面白い句であ
る間仕切の鴨居をくぐる度に腰を
かがめないと頭を打つのである。
この句の子どもは子だけでよいと
思う。

姑も嫁の肩持つ紅白戦

K

年末恒例の紅白歌合戦を詠んだ
のだと思うが、紅組女性軍の応援

に姑も嫁の肩を持ったというだけ
に過ぎないのが惜しい。

妻の肩叩いて出張の留守た
のみ Y

糟糠の妻なればこそ肩の凝
り H

女房の肩をもんでる日曜日

K

出張の留守にの句は肩を叩いて
頼むというのはオーバーにすぎる
ように思えた。口だけか手を振る
位がせいぜいだと思う。糟糠の
妻の句は、妻なればこそ肩の凝っ
たのをもんでくれたという句意に
とれば、重々しい句語を使う程の
句ではないと思うし、そうした妻
だから作者の肩が凝るのだと解釈
することも出来るのでハッキリし
ない句になってしまっている。日
曜日の句はそうした事もあるでは
あろうが共感が持てない。

我慢して孫の力をほめる肩

T

十円でもう肩打たぬ中学生

S

肩叩き子は知り染めた労働

J

苦 ほんめかし肩叩いてる突破

口

辰 始

我慢しての句は孫の力が強い
か弱いのかどちらにでもとれるの
が弱点である。十円での句は中学

になったからというやや理屈っぽ
いのが難である。労働苦という句
語は苦しい句語である。着想は申
分ないのだがこの句語は失敗であ
った。ほんめかしは成功してい
る。そこに句のポイントがあるの
だといえるようである。

肩一つたたいいい事頼ん
どき 周甫

素直な句柄であって好感もて
る句である。

肩にまで伸びた刺青の空し
さよ 和郎

いからせた肩に似合わぬ可
愛い声 寿美司

肩を張るうしろ姿の淋しか
り 有子

三句共まずまずというところで
取立て言うべき程のものを持って
はいないが捨てられぬ句である。

肩落し行く友月の明る過ぎ
K

肩と肩押し合って行く仲の
良さ 杏花

その痛手にふれず下った肩
に添い 酔夢

ほっといてほしい肩の手を
そっとどけ 静水

月の明るいという句には真実味
が感じられなかった。いかにも作
られたという句である。仲の良さ
の句には素直な感情があると思

う。後の二句は深いものをもって
いるのがよいと思った。

吊ズボン肩に重たく街みぞ
れ K

みぞれが降る頃だからズボンが
重いの肩に感じたというのでは
理屈っぽい句になってしまったよ
うである。

剃刀はまだまかされず肩変
り M

剃刀はというのだから理髪店の
ことだと思うが顔を剃るのを変
ったというのを肩変りというのだ
ろうか。代替りだと店の主人が変
ったことになるので剃るのを変る
のが肩変りというのか私は知らな
い。

次回研究題「皮」五句以内
メ切 三月二十日

発表 五月号の予定
宛先 大阪府南河内郡美原町丹上
四〇四

清水 白柳

職人が性か休みは肩が凝り
生 薑

私の体験を句にしてみたらた
うで嬉しかったのしく感じさせて頂
いた。

住所録肩身の狭いところに住
み 以上

白柳

一著名作家の川柳句集一

新刊



浜田久米雄著 麻生路郎序

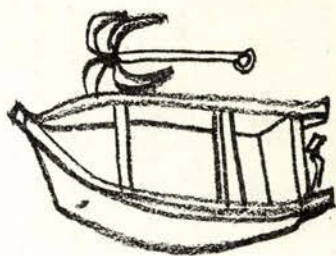
定価300円
送費50円

★本句集の著者浜田久米雄氏は岡山の産。
多年不朽洞会員として又国鉄川柳人として
古豪の名をほしいままにしている。三十余
年の柳歴を飾る数千句中より百句を自選
し、各句に感想を附して世に問うもの。
★六〇〇部限定版につき一語文はお早く。
★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇番
をご利用が便利です。(切手代用可)

大阪市住吉区区内万代西5丁目25

発行所 川柳雑誌社

電話大阪前6081振替口座大阪75050



土佐犬のような女史だが爪をそめ
紅一点味の素にも相似たり

静波 晃

二句の優劣を聴く

女性を誹んだこの作句二句をあなたは叙法や感覚の点から比較して何れが優つて
いるかという問いに答えてもらつた

(編集局)

戸田 古方
土佐犬のような女史だが爪をそめ
紅一点味の素にも相似たり

静波

勸進元は仲々よく選び出されたものと行司たじです。「土佐犬」と「味の素」の二つはともに各の句の「いのち」になっています。両方とも絵にもなりますし、雰囲気もよく出ています。私の好みからいえば後者「味の素」の方を頂戴したいですが、「土佐犬」の方も古川柳にでもでてきそうな穿ちの味がすてられません。

浜田久米雄

女史を批評するのに土佐犬をもつて来た着想は珍らしい。爪をそ

めている女性の多い今日、その女性の顔と爪とを見くらべて吹き出したくなるのをこらえるところに味がある。
紅一点はすっきりしている点を買いたい。紅一点がいるだけで男どもの気持ち、みんなの気持ちに、顔色に表われている。二句をくらべて甲乙はつけがたいが、強いてつければ土佐犬の方であろう。

内藤きさ子

土佐犬のような女史だが爪をそめ

晃

紅一点味の素にも相似たり

静波

選評はあまり得手ではありませんで、納得のゆくような批評は

出来ませんが、私自身と致しましては、この句、どちらも好きです。前者は線が太く、後者は線が細いとてもいいましようか、「女性」という題に對しまして、それぞれ土佐犬の句は、そのもののズバリのいい方に対して、紅一点の句は、やや技巧をこらしたあとが見うけられます。しかし、どちらも味わえ味わうほど、その人物や状況が、ほうふつとして愉快になります。

直原七面山

叙法において前句には女史と言うやや時代的めいた言葉が使われており、後句には句調的に見て非リズムカルなギコチない相似たりと言う言葉があつて、いずれ劣ら

ぬ難点を持つてているが全般的に見て前者にやや長を認めたい。

また感覚の面から言えば二句とも優劣はつけ難い。がしかし、どちらかと言えば前者は女性をや、的確(言葉をかえて言えばけいべつ)に見ているのに対して、後者は女性をあたたかい目でながめ、一人の女性のくもし出すふんいきを美的(肉感的)にしかも尊敬の念をその背後に秘めて、にとらえて表現しているの、後者に好意を示したい。

しかし、二句ともに句意の点においてはちんぷすぎていて、新鮮味が感じられないのだが、これは両句とも句作にあせて句材の選択に充分力量を発揮することが出来なかつたせいだろうか。

それともまた素材採取後におけ

る燃焼過程においてなにか不充分の点があつたのであろうか、その点は明らかではないが、いずれにしても惜しいことだと思ふ。なお強いて言えば、前句においては「女史だが」後句においては「にも相似たり」に今一步工夫の後を見せて欲しかった。

仲どんたく

土佐犬の句、土佐犬のような女史で相当人物がはっきり浮彫りされています。女でなく女史であることよつて後の爪をそめが効いています。紅一点の句、味の素の比喩によつて生きてる句で、それ以上のニュアンスは感ぜられませんが、

先ず、引分けとしますが、私の好みからは「土佐犬」でしょうか。

永松 東岸

土佐犬のような女史だが爪をそめ

紅一点味の素にも相似たり

静波

「土佐犬」と「味の素」の着想の秀逸に、敬意を表します。優劣はつけがたいと思いますが、前者の句はあらあらしいタッチで女性をとらえ、鋭く皮肉つて、突き放してしまつて救いが無いように思います。後者の句は、やはらかく女

性の存在を、味の素にたとえていますが、これはやはり、作者の善意の内在とでも申しましようか、好感がもてます。軍配は紅一点の句にあげます。

八木摩太郎

土佐犬のような女史だが爪をそめ

晃

土佐犬のような女史と言うので、ほぼどんな女史だか想像が出来る。土佐犬は、知らなかったが、純土佐犬にブルドッグを交配した、闘争犬、毎日8軒のトレーニングを必要とし、しかも走らせる事が出来ないのに飼育にも、一苦勞という土佐犬の横綱を、高知で見て、それだけしか知らないが私は、あんな、犬のような女史が爪を染め、女らしさを見せる女性心理に矛盾と批判の感覚を覚えた作者のこの句は強く胸を突くのでこの句の方がよいと思います。しかし、私は、もっとよく女性を凝視して、よく「女性」を見ているなと思う句の方が好きです。

田垣 方大

土佐犬のような女史だが爪をそめ

晃

(A)紅一点味の素にも相似たり

静波

ぱっと見た瞬間はB句が面白くわかりやすく、そのコントラスト

の妙にニヤツとする。即ちユーモラスで笑いがあがる。然し少しエゲツナさが感じられる。A句はわかつたようでいて、ちょっと待てよと考へさせる句であり、B句に比べ深みがあり、ほのほのとしたものを感ぜさせ、女性特有の優しさ柔かきで、男性ブルーのかさかさした空気に、ちよつぱり味付けをしていて、ムードをやわらげている処がよく、女性のよい面を表現している。題が「女性」なので女性の優美さを詠みこんでいるA句に軍配を挙げたい。またB句はあくまで美しくありたいという女性の特性を強調しているので、女性の本能ともいうべきものを、見せつけられた句であり、A句は感ぜさせた句である。然し「味の素」と商品名をいれたのは気に入らないが、「味の素」が調味料の代名詞のように思われている現在では仕方のないことと思う。素はどちらも、うまく組合せている。この兼題には私も

「オラだって女性の一人ヨイトマゲ」とエゲツナイ句を出しているので、B句についてあまり大きなこともいえませんが……。

樋口 舟遊

土佐犬のような女史だが爪をそめ

戦後女性と靴下が強くなりこの

女史はその代表的な女性です。最近土佐犬はあまり見ないが純日本犬の横綱で、大きくて強い。これに似ている女史だが、女性のお洒落の爪を染めている女らしさの片鱗を覗かせている。句は、具体的に表現されていて鑑賞しやすい。ただ「女史だ」のだがが説明で気になる。作者の個性が滲み出た川柳らしい川柳である。

紅一点味の素にも相似たり

この句味の素のカラーシャル見たいだが、紅一点が味の素にびたりで、不変のものがどうかは鑑賞者によつて違う。若くて美人であればなかにこれを目当てで来る不埒な男性も入れて会も明るく発展味の素も一振りで味も上出来。私は紅一点をこんなにたくみに詠んだのは少ないと思う。着想、技巧のスマートさを買う。下五の相似たりが少しかたいようだ。が、かえって句を引き締めている。

以上二句をくらべて、土佐犬と

女史、紅一点味の素、これらをたがいに変えることは出来ず、それぞれ着想の面白味が出てくる。句会席での選の場合は土佐犬の方がよい句に抜け、紅一点が見落されることもあるが、句もよく読んで味わへば、後句のスマートさ新鮮さは、ほほえましい女性らしさが滲んで、わずかに優れていると思ひます。

大鶴 喜由

課題が「女性」であれば、女の性質(氣質)を必ず内容とした句でなければならぬ。それが句の構成上、主になるか副になるかはあり得ると思う。私ははじめの句の方を頂きたい。

土佐犬のような女史だが爪を染め

土佐犬「日本犬にブルドックを配し勇猛としマヌチーフを配して大形とした闘犬」の巨大と面相と闘志が女史ここでは芸能家か、社会的知名の婦人」に似ているが、その反面、女であることを忘れず、その階層が好んでするマニキュアを心得ている。

紅一点味の素にも相似たり

紅一点「多くの男子の中に交わる(美しい)ただ一人の女性」が味の素「グルタミン酸ソーダー」を主成分とする調味料」に相似ていて「性質形状が互に似ている」味の素の味が女の味すなわち愛きようを意味するのではないかと思う。感じとしては一は男ならまだしも、女史に対し土佐犬に似ている点がちと大げさ過ぎはせぬかと思う。二は紅一点に対し味の素との相似が題意から見てもボヤケていると思う。

抒法は一はちと古いがまあまあというところ。二は新味を出した

つもりのようなだが、わからせる用意がなさすぎると思う。バック然と味の素が紅一点に似ているのでなく具体的にこんなところが似ているという比較しやすい性質形状の対象物が欲しい。例えば、さくらんぼ「甘くて、しぶくて、丸ぼちゃで、色はほんのり淡紅色」などの類がいいのではないかと思う。しかし味の素で結構だといわれる人が多ければ、私の頭が古い、考えが浅いか、川柳及び川柳以外の詩の見聞にうといかということになる。

林 夢虹

一、鑑賞態度

私は句によつて解剖すればその句の命がなくなるのではないかと考へて居ります。句の鑑賞はあくまでも主観にあると思います。良い句、それはあくまでも、私の見た良い句に過ぎません。詩には客観の価値はありません。

本

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話(271)三三四四番

二、「土佐犬の」この句は「土佐犬のような」の言葉で生きています。この言葉が爪を染めているところに女らしさがあると言う平凡な着想、表現を救っています。

土佐犬のような女史、それはおそらく中年の、そしてなにかある不満を持っている、生活力の旺盛な自信に満ちた態度の女性なのでしょう。女らしき等は微塵も持ち合せでないような女、その女史が爪を赤く染めているのを作者は観ました。そこに女史の「女」を観ました。女の哀しさを感じました。この句人物描写に成功しています。

三、「紅一点」この句も「味の素にも」の言葉にも成功しています。味の素、それには料理に使えばどこにも姿を見ることは出来ないが味を引き立てる。作者は女性をそのような存在であれと思っておられるでありましょう。女性の持つ一つの雰囲気やうまく表現しておられます。しかしこの句からは、一般的な女性と言う印象を受け、ある特定の「女」が出ておりません。「土佐犬」の句に見られる個性と人物描写がないように思えます。

またこの句が損をしているのは「紅一点」の言葉にあります。この言葉には手垢がついております。一言でなにかも表現してい

ながら常套的言葉であります。

四、結論、共に表現、素材に難がなく、一応句としてとのつています。しかし、二句とも私の好む句ではありません。なぜなら、句に「詩」がなく、私の情感を打たないからです。それは智にうったえるからではないでしょうか？

小浜 牧人

土佐犬のような女史だが爪をそめ

紅一点味の素にも相似たり
比喻を句に取入れた場合、本題との距離が大きい程面白い。

「爪を染めた女史」の句は土佐犬を比喻にもちいて、おしやれをしたい女性の本能の盲目的なのをついて、ユーモアを感じる。句の表現の「女史だが」というところに、散文的な難があると思う。

あとの句

紅一点の女性は、若くて気の利いた女性であろう。その場には非必要な人ではないが、調味料的な役割を果たして、その場の雰囲気盛り上げる存在となっている。

よくある状況だが、味の素と比喻して成功した句であり句の表現にも難はない。

両句を比較して前の句は着想が平凡であり、後の句に「味」を感じる。

正本 水客

(A)土佐犬のような女史だが爪を染め

(B)紅一点味の素にも相似たり

静波

Aの句、女傑というに相応しい闘士型の女性を「土佐犬のような」と表現することは、余りにつき過ぎて面白くない。その女史も矢張女であつたという着想も古い。全体に何となく感じられるユーモアの底に流れるベネソスが、わずかにこの句を救っていると言えよう。

Bの句は、紅一点と味の素という比喻が意表をついて成功している。ただ下五で「相似たり」と説明してつたために、この句は大きく減点される。おもしろいと思う。私の好みからすれば、ちゅうちよなくBをとるが、兎さんにしては、Aの句を兎作品としてとり上げられることは少し迷惑である。

杉本 一鶴

土佐犬のような女史だが爪を染め

威風堂々の貫祿、黒ぶちのメガネ、政治・経済・芸術等あらゆる面で一歩も後へひかず、智性のかたまりみたい。「あれでも女性か？」口さがない雀どもの噂に

のぼる事しきり。

★ご贈答にご利用下さい

あなたの句帖が再版されました



一人一冊素晴らしい句を

橘高薫風子著 麻生路郎序

川柳 句集



価 250円
送費60円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って採まれ、川柳編集部員として精進を続けている。前途ある好作家である。

大阪市住吉区万代西五丁目二五

発行所

川柳雑誌社

電話 大阪 6081
振替口座 大阪 七五〇五〇

★路郎好みにだけに、すばらしく気がきいています。句会でお使いになるなり、抜けた句の整理にお使いになれば、何冊かで、あなたの句集の礎が出来ます。又柳友への贈答に句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい。

一冊八〇円
(送料別)

詠 近 舟 同

大阪市橋本緑雨

大阪の味も忘れず離れもせず
神様も相談に乗らぬ歳となり

和歌山市秋月宏方

生みつばなし豚の世界はそれでよし
六十になっても女何か塗り

大州市米沢曉明

貸馬の脊で秋吉の景を賞で
どっしりと本家にこわす鬼瓦
公園の裏道恋を語る道

略図ではこうも曲っていない道
断われ帰る街頭明るすぎ

今治市長野文庫

年賀への返事に暮れるお元日
間のびした顔へセールス喰い下がり
干し魚のどの顔もみな無念顔

今治市月原宵明

まだ大丈夫ですと按摩に励まされ
私立出る息子に専務の椅子がまち
猿の眼はくのに山河を恋う如し
勉強で無い灯と知っている夜泣き
誤字を打つこの煩悩のタイピスト
リヤカーで春の夕べに妻を乗せ
退院が近くパチンコ通いつめ
根性と云うもの捨てて新日本

それでも御本人は女のたしなみ
と不似合な爪を染めていたという
処に、吹き出したくなる反面、
「やっぱり女性だね」という一面
を見せられる。

紅一点味の素にも相似たり

静波

例外はあるけれど、総体的に紅
一点の場合オールドミスか、勝気
な女性のように思う。その様な女
性であっても、男ばかりの中に一
人だけ交わっている、なん
となくやわらかなムードが感じら
れるものである。そのやわらぎを
「味の素にも」と表現されている
処はいい得ており成程と思う。

土佐犬の方には面白味があり、

紅一点の場合は女性という面では
強く浮き出されているが、双方共
に句の内容は心に触れるものを感
じられないので好きな句とはいえ
ない。

あえて軍配を上げるとすれば、
紅一点に上げたい。

今西 生薑

土佐犬のような女史だが爪を染

め

紅一点味の素にも相似たり

静波

(1)の句の爪を染めは、犬の爪を連
想出来それが却って、こだわりに
なる。爪を染めるのは一般的なこ
のみで、上の句の土佐犬とはむし

る関係が少いようである。このよ
うなタイプの女性は、それより案
外声が澄み、声の高さもソプラノ
に属する人が多いように思う。こ
のような意味で、爪を染めは常と
う過ぎて句を弱めているように思
われてならない。

(2)前句に比較して、この叙法は、
線が女性的であるが、味の素とい
う言葉から、座のムードをよく出
していると思う。但し、相似たり
と言いつつて終うのは、一寸どう
かと思う。味の素的な作用経過を
表現する下五にかえたら、更によ
い句が出来たのではなからうか。

早川 清生

土佐犬のような女史だが爪を染

め

紅一点味の素にも相似たり

静波

題詠を批評されることは句主に
とって、不本意なことが多いが、
この両比喻句から私は散漫常凡
な印象を受けただけで、何の感激
も覚えなかった。強いてどちらか
といえばまとまりと鮮明さにおい
て、晃氏の句であらうが、この句
違和感の中から女の本性あるいは
かなしさを衝いた句としては、比
喩も常識的だし、内容も新しいも
のだと言えない。

静波氏の句は「見斬新な着想の
ようにも見えるが、「味の素」と

いう比喩も世間一般でよく使われ
るもので、新しい発見と言えない
し、比喩の焦点にも少しずれが感
じられる、また措辞にも難はある
が、反面楽しめる未来性も感じら
れる。ともあれ比喩が着せ替え人
形の着物のようなものになっては
駄目で、手垢のつかない句の内容を
を深め、高めるものを自分の眼と
言葉で探し出さないと価値がな
い。

と、勝手なことを述べたが、両
句日頃のユニークな句風には敬服
している。

浜田久米雄

退職記念句会

日時 四月二十六日(日)

十三時

会場 岡鉄クラブ(岡鉄局横)

兼題 勇退・春・故郷・制帽・
汽笛

席題 三題(当日発表)

会費 百円
(会員・会員外を問わず)

賞品 イ総合得点十位まで呈賞
(出席者優先)

口兼席題を通じ三光に選
者短冊呈賞

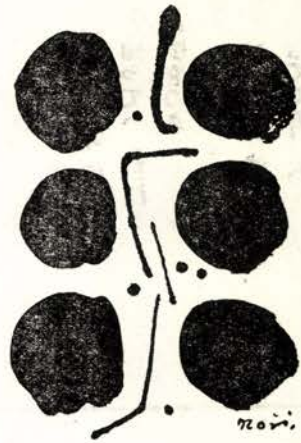
投句 前日必着するように岡山
駅乗客本部沖野三平あて
句袋(裏面に句主記入)
で投句すること 投句料
三十円

川柳雑誌社岡山支部

集路一

風

尼 綠之助 選



落選のビラ木枯しがはためかせ

雨風も死者をむちうつように鳴り

暴走のトラックを追う空つ風

淡なき風に有情の四季があり

東京タワー風に揺られるのも技術

楽しさは風にも色がついて見え

古着屋をイライラさせて春の風

北風ヘチャルヘカボヘ音で鳴り

北風の中をデイトの夜を重ね

寒風を乗り切る家路そこに灯き

狭い露路転げるように風と抜け

ふるさとは懐し土の匂う風

寒風に寸断されてオルゴール

電化して厨が寒い夜の風

熱燗の屋台を風がつ、抜ける

鼻すゝりながら風の子風と組み

北風と戦うように風の鈴

わくら葉の風にさかろうすべもなく

新築のもう狂つてるすき間風

新開地まばらな家の風あたり

風のたび分敷場のことに落ち

佳 作

消防車帰る点呼へ風が止み

三島 月

金 策

小西 無鬼 選

顔見世の切符に並ぶ京の風 季 鳥

道草をするなど風が押ししてくれ 代仕男

天

地

ハイヒールで風を踏んでゆく 生 薑

人

ネオンの灯川の汚れは風で知り 雄々

はたん雪風の子たちの頬をなめ 恵二朗

貧乏をあざけるようにすきま風 光 郎

特急の風だけ残し田舎駅 万 竿

借金の上に借金い生活し 市 郎

金策のつかないまの青写真 十九平

親株を売って倍額増資取り 愛 嶋

金策はいつも母さん狩出され 秀 峰

金策と一石二鳥の旅に出る 初 雨

金策の疲れが分ける縄のれん どんたく

金策も尽きた眼で読む自殺記事 同

金策で待つ半時のはずかしさ 淀 月

金策と知らず玉露をいれて出し 同

無理もない金もハンコも断られ 静 水

大臣という金策の途があり 可 住

金策をいういらだちを子に知られ 伊津志

あてのない金策に出てけつ ますき たいお

金策へ女社長腕を見せ 兎 男

金策のとこだけヒソヒソ借電話 弥 生

金策の名人幹事に当選し 判 志

金策に旧知OK得てホッ 繁太郎

金策へ終止符をうつ除夜の鐘 句楽坊

恩師などおだてて金を借りに来る 光 道

金策は下手くそいつも馬鹿にされ 宗太郎

金策に竹馬の友がなかりけり 宗太郎

色紙短冊
書画用品

大坂戎道
丹 青 堂
やんせいのこ

金策の顔はいつもと違う顔 すみれ
金策に来たらし中々腰上げ 同
金策もケタが違つて自家用車 光 郎
金策に恥を忍んだバベルを押し 代仕男
背に肚を覚えて家宝を売る手形 和 三郎
金策も尽きたレールが月に冴え 同
金策を頼めば急用思い出し 和 郎
金策に出掛けたまふ事故に逢い 勝 子
金策の土産と知らず頂戴す 野 路
あるとこに有る金策のあはれ 九 平
銀行はほかの借金迄調べ 法 子
もう金が出来ぬとなれば肚をさめ 井 城
金策は狂言強盗思いつき 雅 城
金策は成らずネオンの灯は招き 雄 々
金策は親に任して日を決める 木 魚
高い敷居またいで金策かしこまり 李 魚
金策の焦り競馬の穴を追う 孝 風
金策もならず不渡り出して終い 専 翁
金策が出来ず一そう逃げたるか 半 月
金策へ妻がねだつた演技賞 千 翁
金策へまともに風が吹きつける む じ な

金策といわず大安売りといひ 三五島
金策に昔は娘を売ったけど 鶴丸
流石知事一寸手土産マルク債 一峯
金策がつく迄旅行中とかき 杏花
金策の言葉道々練習す 隆子
横へいに金を揃えて 高利貸 滋雀
金策を頼る相手も火の車 同
前借り金の知らぬ子がはやく 旭峯
金策へ立った根も葉もない噂 生薑
金策で頭を打った使い込み 同
金策を腕組みとかぬきまで聞く 弘朗
金策は出来たがスピードのひかり 圭水
金策より先きに縁談出来ちまい 恵二朗
金策の上首尾湯女をからこうて 同
金策の話になって座がしらけ 宗義
金策の疲れ三カ日を寝る 素身郎

佳作

媚態見せ女金策すぐに出来 光郎
金策へ銀行の三時容赦せず 保夫
金策は馬に負けたと言わぬなり 圭水
金策のワケ根掘り葉掘りして泣き 八九寸
数え日の金策利子など言うこれぞ 藤波
金策はパイ赤信号を渡って 和郎
開店の金策万国旗で飾り 九呂平
金策は借りて返して又借りて 藤波

サンプル

吉田圭井堂選

ウインダのサンプル通りに着こなせず 弘朗
サンプルを並べてセイルよく喋べり 初甫
サンプルを集めて壁も床も張り どんたく
マネキンに着せたサンプル羽が生え 同
サンプルをつめて華局粗品にし 秀峰

サンプルの葉を試す二日酔 十九平
サンプルを作ったままで倒産し 和郎
空くしなしサンプルを送って来 静水
サンプル集め世帯の足しにする 可住
サンプルのりキール目を引くギョムパー 淀月
サンプルと違ふ丹食べきさ 兎男
サンプルを貰って困るかし場所 凡子
サンプルの気前よく呉れたしや 判志
現代つ子の見本のような娘持ち 歌子
くつの底へらしてサンプル持廻り 句楽坊
サンプルと余りの違い目を見張り 繁太郎
毛生え葉のサンプル父へ貰って来る 光道
サンプルで乙女心はもう動き 万竿
写真屋は出来のよいのを額に入れ 光郎
サンプルへ近所も誘い恨まれる 代仕男
この夏の型でマネキン花に佇つ 和三郎
サンプルを集めるのが趣味です すみれ
サンプルのようにうまくは出来ていず ろ亭
サンプルの小型が旅行用となり 保夫
サンプルが社運どうか持ち直し 九呂平
サンプルのつもりで出した娘の衣裳 野述路
サンプルとも言はれずと云われ 千翁
サンプルと師走の街を駆け廻る 李鳥
サンプルへ英語ばかりを書き列べ 雄々
サンプルもすてきパーはいも 井蛙
外交員サンプル掛け放つとかれ 雅城
サンプルのような愛の葉出来上り 幸風
サンプルをつけて出た日の顔を撫で むじな
サンプルを縫合せて座布団出来上り 半月
サンプルはサンプル向きに作られる 旭峯
サンプルのように秀才青白し 滋雀
分譲地先ずサンプルに家を建て 杏花
サンプルと違った感じ良く似合い 松風

サンプルの方をどうでも買ったがり 三五島
サンプルが電気器具にもあつたら 鶴丸
効能と別にサンプル貰つとき 圭水
返す奴のサンプル末つ子離さない 宗義
佳作
サンプルのときには効いた風邪ぐすり 愛鳩
サンプルの大きいまきにつり込まれ たけお
柄見本庶民に手の出ぬものばかり 光郎
サンプルをどつさり入れて福袋 宗太郎
サンプルを注射したのに銭とられ 勝子
サンプルに劣らぬ盛りと味もよし 専翁
京染めの見本にたかる長屋中 藤波
サンプルと馬鹿にしてたが良くねむれ 生薑
サンプルを出したが資金繰りつかず 隆子
見合写真サンプルみたいに並べられ 素身郎
人
サンプルをはめるばかりで乗つて来ず 八九寸
地
サンプルが売れてマネキン丸裸 藤波
天
セールの見本並べる順があり 恵二朗

宴会・出張パーティ・折詰弁当
梅里ノ店
大 萬
料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL (六三三) 三九三五番
鮎の店 アベノ橋近映地下食通街
TEL (六三三) 〇一四七番
串の店 南区豊屋町三ツ寺センター
TEL (三三三) 九一八四番

柳志寸言



本多柳志

◇人に自慢の出来る友達、一人位は
もちたいものだ。自信をもって人に見
せられる、川柳の一句位はもちたいも
のだ。
◇人体を分析して見ると十萬円足らず
の有価物質になるそう。死体は大学
の研究室でも千円位にしか買わない。
生きているうちが花だ。
◇ニンニクを細かく分析して見てもあ
のスパラシイ、カローリ源は見つから
んそう。川柳を細かく分析して見た
所で、そこには何が残るだろうか。組
織された一句の中にこそ、芸術も詩も
あるのだ。
◇他人の句を抹殺する権限なんか、誰
にもある筈がない。選者が没句にする
のは決して、句を抹殺する事ではな
い。
◇サーカスの動物の芸はエサを得るた
めの手段にすぎない。手段にする所に
芸の墮落がある。何らかの目的の為の
手段の一つとして作る事は、川柳の墮
落であり詩の冒瀆である。

柳界展望



句会

▼本社三月句会は六日(金)午後六時から千日前電停前自安寺で開催。早春の息吹きの感じ始める宵を柳友お誘い合わせの上多数のご出席をお願いする。

▼七面短詩文学クラブ川柳部二月句会(和歌山市)は五日(水)午後六時から奥新和歌の浦、魚叉楼で開催。

▼南海電鉄句会(大阪市)は二月十三日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。

▼コクヨ川柳会(大阪市)二月句会は二十一日(金)午後五時半からコクヨ株式会社社会議室で開催。

▼大阪通信病院川柳会二月句会は二月二十九日(土)午後二時から北館五階会議室で開催。

▼川維岡山支部新春句会は一月十八日岡鉄クラブで開催。

▼たけはら川柳会二月例会は八日山内静水居で開催。

▼羽曳野病院どんぐり川柳会(羽曳野市)新年句会は一月十二日(日)プレセント交換会の余興などを企画華やかに開催、句会後指導の川村好郎氏を囲んで懇親会があった。

▼柳都川柳社新津市十五周年記念全国川柳大会は昭和三十九年五月二十四日(日)午前十時から新潟県新津市本町一新森亭で開催。第一部雑詠選者七名、各選者二句宛、第二部雑詠選者八名、各選者二句宛、第三部席題、第四部講演、投句は第一部に限り、百田封入の上新潟県新津市駅前柳都川柳社宛。

▼金子吾風句碑除幕式は昭和三十三年三月八日午後一時から上田市市民会館で開催。

▼第七回大磯西行祭佐々木信綱博士追悼会は昭和三十三年三月二十九日(日)午前十一時から神奈川県大磯町鳴立庵西行堂前で開催。

▼大万川柳十三周年記念大会は昭和三十三年三月二十九日(日)正午から大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大万で開催。

▼第十五回愛媛春の川柳大会は昭和三十三年四月二十六日(日)午前十時から松山市中歩行町PTA会館ホールで開催。兼題、未来図・手心・折り返し・紅生婆・繰込み・栄冠涙あり・夜桜、各題三句、投句は縦二十六横、横四の句箋を使用、裏面に雅号明記の上、投句料百田同封、四月十五日迄に松山市道後上市九五塩見草映宛。

▼第三回伍健忌川柳大会は昭和三十三年二月九日(日)午前十時から松山市大手町愛媛新聞社ホールで開催。

▼奥しなの(須坂市)八十三号は昭和三十三年十二月「行く水」刊行特集号として発行。

▼第十八回長野県川柳大会は昭和三十三年五月十七日(日)午前十時から上田市市民会館で開催、兼題、四十からの人生・快晴・再起・適當・聖火、席題三題、各題二句、投句は百田同封の上四月三十日までに上田市中常田矢島破酔宛。

▼川柳なごや三百号記念句会は昭和三十三年三月十五日(日)正午から中區小林町「東東院」で開催。兼題、昇る・人気者・戀ぐ・新機軸、各題三句。

▼川維木次支部創立十周年、むらくも創刊十五周年記念大会は昭和三十三年四月五日(日)午前十一時から島根県木次町松江館楼上で開催。兼題、春風・別室・夜桜・民アバート

父親・中年・十五、投句は五十円封入の上三月三十日迄に島根県木次町役場藤井明朗宛。

消息

▼若本多久志氏(豊中市)は、二月八日商用で空路香港へ。九竜難民アバート

「雑草の生きる力のたくましさ」

▼浜田久米雄氏(岡山市)は国鉄生活の名残りの旅行を、一月二十五日二十六日の両日、高知の竜河洞・桂浜・室戸岬と回遊、又、二月八日まで夫人同伴で、長崎・雲仙・阿蘇・別府と巡り、長年の内助の功を慰労された。「雲仙で真知子と春樹また出合い」

▼田垣方大氏(倉敷市)は二月九日夜、不朽洞へ長距離電話をされ、路郎主幹ご夫妻のご機嫌を伺われた。「十二月十五日から倉敷大阪間はダイヤル直通になり、一度お声を拝聴したいと思っていたのでダイヤルを廻してしまいました。が、先生が倒れたと聞いてショックでした。どうかご要心下さるようお願い申し上げます」

▼長谷川三司氏(尼崎市)は下肢骨折のため入院加療中だが、二月十日頃にはギブスも取れるとのこと



トッ普を行く

スイス・アルベ社と

技術提携!

ボールペンの決定版!



トッ普の
ボールペン

とで一安心だが、その後のマッサイジがまた大変だとのことでした。

▼中松一恒氏(加賀市)の経営の精神病院から一月二十五日午後七時半頃出火、二階建病棟一棟を全焼した。永年辛苦の末に完成した病院が二カ月余で烏有に帰した訳なので、少なからぬ衝撃を受けたが、鋭意復興に尽力しておられる。

▼野村味平氏(加賀市)は中松氏を早速に見舞い激励された。

▼川岡露眼子氏(諫早市)は諫早公民館で開催された正月の文芸即売会に川柳作品を短冊に揮毫出品された。又、氏の十秒間に書く露竜の筆書きが一番好評を博したそうである。「職業が変わったので句が買われ」

▼光好陽子さん(岡山市)は昨年は母堂と二子息のお嫁さんとが一

時に入院したりで悪い年だったが、どうやら落着き、今年は三月に新居が完成する予定で、良い年になるだろうと期待しておられる。

▼松田半月氏（大阪府）は一月十日札幌へ。二、三ヶ月滞在の予定とのこと。「雪まつり青い目チラホラ混りおり」

▼山内静水氏（竹原市）は竹原川柳会に若手の息吹きを育てる努力を続けておられるが、このほど女子高生生の参加もあって会に潤が出来楽しみにしておられる。

▼田万清臣氏（大阪市）は昨年亡母七十回忌を営まれたが、その際の供養のため高松中学校時代の歌集「母よべば」を出版された。

▼野尻弘氏（大阪市）は十一月下旬に出発してヨーロッパ旅行を来し、一月二十三日無事帰国された。

▼時実新子さん（姫路市）から、「川柳書架での句集「新子」紹介ありがとう存じました。湯田中の中島紫柳郎先生が「新子」をお求め下さりまして以来、姫路に娘が出来たとおっしゃってお便りを下さいます。今日は路郎先生「天妻のことが多く書かれてあります」

▼菱田満秋氏（東京都）は一月二十二日、社長夫妻を案内して日光東照宮へ参詣観光日本の代表選手だけのことはあると感心する美しさでしたが雪が積って寒いのは参りました。「東照宮バック

カラーで撮ってやり」

▼吉川亜人氏（山口県）から「川柳雑誌二月号拝受、ご老体でよくも精神力の強さにと感服いたしました。隅から隅まで血の通った雑誌誠に柳界のため同慶申し上げます。住吉区には、元、「みおつくた。」

★眠っている本を

の運動を続けております。一人でも多くの方が協力下されば、次の世代の人々に大いに役立ちます。ご寄贈は短詩文学（詩・歌・俳・柳）の書ならびにそれ等に関する随筆・エッセイ等。

大阪市立中央図書館内「短詩文学文庫」

世話人 麻生路郎 宛

便宜小生の自宅に送って下さってもよろしい

読のすすめなどに時間を忘れておられる。

▼黒柳紫香氏（豊中市）は既報の如く新阪急資材部倉庫課長を昨秋定年退職されたが、新阪急ホテル資材部配給課長に帰任咲きされ

し」時代の山本光雄さんもおられます

▼越智一水氏（今治市）は最近愛媛県内の婦人川柳人が数を増して来たので、新年以来その調査に専念しておられ、作句生活にとともにこういつたことも今後続けたいと思うとのこと。また、伊予路は今年に例年になく暖かくて春がそこに来ていそうである。

▼西いわを氏（羽曳野市）は療養生活の中で川柳が何よりのうろおしとなり、新人の指導、雑誌の購

▼中村九呂平氏（下関市）は一年余停滞していた一杯水句会を再発足させ、軌道にのせ張切っておられる。

▼浜田久米雄氏（岡山市）は健康上の理由から半年繰り上げ三月末をもって退職に決められ故郷の古永町で第三の人生に出発される。「晴耕と雨読の故郷が待っております」

▼安本美喜さん（松原市）は新婚旅行後、松原市の新居に落着き新生活のスタートを切られた。

▼河野春三氏は、現川連の理事長である今井鴨平氏の急逝に際し、岐阜へ駆けつけられ「川柳現代」を鴨平氏が独力でやっていただだけに、いろいろの問題もあって岐阜に三日滞在された由。

句集

▼今野空白川柳句集「迷子の影」は昭和三十八年六月三十日川柳社人社から発行された。著者のあとがきに、「川柳というものに取り憑かれて約十五年、ロマンスも、リアルも年と共に、又頭髪と共にうすれて来て、益々ボエジーから遠去からんとする淋しさに釘を打ち、将又その上に何かを積み上げんとする苦肉の策を打ちめぐらんものと思ひ立ちて……」とある。

「白き花白き寂しさに白き儘」B6版八十七頁、定価五百円。

▼今井鴨平氏（岐阜市）は二月十日午後三時四十分心臓麻痺で急逝された。葬儀は十二日午後一時から自宅で行われ、川柳家多数が参列した。氏は生前現代川柳

不朽洞会から

▼臨時理事会を三月九日午後六時から千日前電停前東入の自安寺で開催する。（多）

新会員紹介

二月

☆細呂木魯木（加賀市）正

☆高木 桃里（笠岡市）正

☆小林 孝正（正）

三月

▼退会——加藤繁雄（大阪府）

米虫一乃字（大阪市）両氏は家事の都合により一月限りで退会された。

大阪・名古屋・伊勢を便利に結ぶ

近鉄2階特急

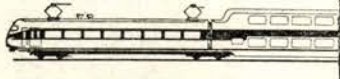
大阪一名古屋ノンストップ

2時間13分

大阪上本町発……毎時0分
名古屋発……毎時30分

▶伊勢・名古屋ゆき
大阪上本町発……毎時15分

▶伊勢・大阪ゆき
名古屋発……毎時45分



特急券のお求めは
21日前から近畿日本
本支店各案内所

近鉄

第百五十六回 昭和三十八年度最終回

大萬川柳

兼題「波の音」 入選発表

選者 麻生路郎先生
 投句総数 三百七十二句
 入選 二十九句

- | | | | | | | | | | | |
|------------------------|-----------------------|------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|--------------------------|-----------------------|------------------------|-----------------------|------------------------|
| 波の音係りもテレビ局勤務
富田林 美房 | 波の音故郷は赤い蟹も這い
八尾 弥生 | 波の音人を呑んだとも見えず
大阪 一栄 | 波の音島の哀話を聞かされる
声 専 翁 | 故郷を出る決心へ打つ波の音
大阪 保夫 | 波の音うるさし出張報告書
宮崎 卯之助 | 波の音聞いてるような句碑が建ち
大阪 弘村 | 裏方は汗だくだけの波の音
幸子 雄々 | 詩人詩が出来ずうるさい波の音
員 一鶴 | 大企業語地波音遠くなり
和泉 東天紅 | 波だけが聞え湯の町もう眠り
大阪 阿茶 |
|------------------------|-----------------------|------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|--------------------------|-----------------------|------------------------|-----------------------|------------------------|

輸送船母国に近い波の音
荒波の音するように面きあがり
見島 恵二朗

波の音果てなし老後をふと想う
波の音まで聞えそう筆の冴え
(人)

岬まわればもう故郷の波の音
(地)

波の音シーズンオフの窓をしめ
大阪 梅里



GOLDEN O.S.K.の紳士服

各地特約店に有り

スマートで
着心地良い
(天)

大阪 あいぎ
荒波に挑む地声で子をあやし

昭和三十八年度
大萬川柳ベストテン確定

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|----------------|-----------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|-----------------|-------------------|------------------|------------------|-----------------|
| 一 松江 梅里 三二、〇 大阪 | 二 橋高薫風子 二八、五 大阪 | 三 正本 水客 二〇、〇 大阪 | 四 本田恵二朗 一九、五 見島 | 五 田垣 方大 一九、〇 倉敷 | 六 土井 文蝶 一八、〇 大阪 | 七 本多 柳志 一七、〇 大阪 | 八 西川 晃 一六、五 大阪 | 九 山川 阿茶 一五、五 大阪 | 一〇 高木 桃里 一五、五 笠岡 | 一一 川村 好郎 一五、五 泉北 | 一二 伊集院 良 一五、〇 大阪 | 一三 永松 東岸 一四、五 岡山 | 一四 出原 真奇 一四、〇 笠岡 | 一五 木山 遠二 一三、〇 笠岡 | 一六 山本 素郎 一三、〇 堺 | 一七 内藤ささ子 一二、五 岸和田 | 一八 傍島 静馬 一二、五 神戸 | 一九 小西 雄々 一二、五 米子 | 二〇 吉田圭井堂 一二、〇 堺 |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|----------------|-----------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|-----------------|-------------------|------------------|------------------|-----------------|
- 以下略

次ぎの兼題「きもの」五句

- 〆切 三月十日
 発表 三月二十日
- 〆切 四月十日
 発表 四月二十日

大萬川柳会々則

一、本会は川柳に興味を持たれる全国の同好者に広く呼びかけ名実共に唯一の川柳道場としてその技その韻を競い斯道の向上発展と柳人相互の親睦を図るを以て目的とします。

二、毎月の出題並びに選句は川柳雑誌社主幹麻生路郎先生にお願いして居ります。

三、投句はすべて一句毎に句箋に清記し無記名のまま一連番号を附して選句をして頂きますから絶対公平であります。

▽毎月十日締切二十日に発表。

出題及び入選の発表は毎号の川柳雑誌に掲載されます。

四、左記の採点法により月々の得点を加算して順位を定め毎月ベストテンを発表します。

▽天の句四句 地ノ句三句 人ノ句二句 佳吟一、五點 平抜き一、〇點。

五、毎年三月より翌年二月までを一年度として年度間の総合得点の成績により順位を定め年度ベストテン把持者に賞状並に賞品を贈り大会の選者に推薦し祝賀宴に招待します。同点の場合は前年度優位によって定めます。

六、大会は毎年三月に行います。

七、会費は不要。但し大会の会費は百円投句料五十円。

八、投句その他の連絡先は大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇大萬川柳会宛に願います。

昭和三十九年三月 大萬川柳会

いのちある句を創れ



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社二月句会 (大阪市)

2月7日 午後6時
会場——千日前 自安寺

二月句会は雨の空模様でも、定刻には会場にいっぱいになった。あたたかい会場で川柳のダイゴ味に浸る。健康の勝れぬ路郎先生も、姿を見せられたことはうれし極みである。本夕の句評は清水白柳氏が一月号本誌から、いわを、春菓、水客氏らを初め多くの柳人の句を採り挙げて批判された。続いて席、兼題の披露に、続々と新人の雅号の呼び声が表れるのも楽しい句会風景であった。今月の不朽洞杯は、藤村女さんで、絶賛の拍手裡に同氏の手にその栄光が輝いた。時に午後九時。

(摩)

出席者——路郎、文蝶、八郎、水客、野菜、すすむ、トメ子、摩太郎、清人、あきら、四郎、吉太郎、花梢、句楽坊、有子、多平、李鳥、専翁、女、静馬、喜雄、文秋、白柳、天樹、みさ子、旅風、幸雄、進之助、季費、井平、玲人、珠笑、水京、古方、白溪子、たつみ、すみれ、

判志、美房、茂三、真砂、一栄、清子、いさむ、舟遊、尚史、庸佑、六竜子、恒明、明子、宏子、夢乃、

兼題「日溜り」 正本水客選

日溜りで一寸一服ブラカード 繁太郎
日溜りに明治恋しい背をまるめ 光道
日溜りの塀に義足をまたせかけ 生薑
日溜りへヒヨコのママが呼んでいる 清子
日だまりを避けるような暮しむき 吉太郎
日溜りによって校舎の受験の子 すすむ
日溜りで群行少女が花作る 清人
日溜りに石焼きいもも腰を据え 恒明
日溜りを追うてあふれが寄つて来る 水京
日溜りを追うてまよひ座の移転 あいき
日溜りへ席を移して指し直す 美房
日溜りのベンチで家出見つけられ 野菜
日溜り作業のベルの待ったなし 清子
日溜りで空気のよこれ教えられ あきら
小つやい竜巻が日溜りまで来て消えた 古方
日溜りのサボテン冬場を独りじめ 茂三
日溜りへ動かぬ人になって暮れ 文蝶
日溜りも寒い寒いと京の街 玲人
日溜りの坊ちゃん刈りはこちやくれ 阿茶
日溜りへ子供とともに追いやられ 美房
日まだりで観光バスを待つ小旗 花梢
日溜りへバス待つ列がのびてゆき 恒明
グループで日溜りにいる昼休み 庸佑
日溜り無聊雲がちぎれたついた 古方
日溜りを我がもの顔にする駐車 恒明
日だまりで職場の冷えを持つて出る 清子
日溜りで飯む牛乳の無表情 水客

兼題「冷静」 戸田古方選

落着くと判った金の隠しどこ 黙平

更けてゆく夜冷静にして雪の音 太津朗

求婚は頭ひやしてからにする 野迷路

我鳴り立てる野次へ答え物静か 八九寸

冷静を取り戻してから話らなし 水客

冷静におく算盤のまた違い いさむ

散歩から帰れば怒り消えていた 珠笑

冷静になって淋しい爪を噛み たつみ

淡々とセツスを説く手のチョーク 旅風

冷静になれば馬鹿げた恋であり 幸雄

冷静に冷静に自分の影に言いかせ 水客

冷静になって女の慾がみえ すみれ

冷静に調べなおせば三三九 旅風

冷静やまだ酔うてへん酔うてへん 文秋

落着いて聞けと言われて取り乱し あいき

冷静になった今ではただの人 圭井堂

冷静な態度が相手に火をつける 庸佑

深呼吸して冷静を取戻し 進之助

冷静に事が運んで物足らず 文蝶

冷静にお不動さんの牙を見る 李鳥

冷静に戻る父子の無口なり 舟遊

冷静に努めこたえん奴にされ 尚史

冷静な彼女でムード湧いて来ず 珠笑

冷静な判断人にして貰い 阿茶

冷静な批判下した他人事 あきら

冷静になれば妻子に冷笑され 摩太郎

憎しみがつのる相手に冷静さ すすむ

冷静になった無口へ気を使い 白溪子

安定ムードチョンビリスルはしくなり すみれ

一寸したスリルも見せて山のバス 白溪子

雪山のスリル遭難史を綴り 白楽坊

ハイカーのスリル足下に雲が飛び 進之助

銀嶺へ恋とスキーのスリル踏け 阿茶

僻地の子のスリル馬の腹ぐる 一栄

曲乗りのスリル向うは命がけ 光道

岩登るスリル味わう命綱 黙平

ガラス拭く足下に御堂筋があり 李鳥

スリル追つた馬奔るウグスに舞い 瓢太

配当の穴でスリルを追う男 清子

株のスリルいつか覚えた未亡人 天樹

へそくりのスリルたつたの二千年 摩太郎

生活のスリルが欲しい現代っ子 美房

よろめきのスリルをクレに教えられ 玲人

いつはのスリルを乗せてコースター 白溪子

子には子のスリルがあつて遊園地 清人

有料道路スリルの味が飛んでいる 文秋

兼題「介抱」 金井文秋選

介抱をさせてほしいと気をもませ 尚史

介抱をいたわる寝息わざと立て 宗義

介抱をしながら鍵のありかきき 光道

赤飯の粥介抱もうなすいて 天樹

片意地があり介抱を困らせる 玲人

闘病の垢を母丁寧に拭いてくれ 清子

この友と飲めば介抱思い出し 花雄

人並の介抱獣医は骨が折れ いさむ

大丈夫の声聞き疲れどと出る 美房

リンゴをくたが介抱となりし今日 水客

気短かが彼女の介抱に素直なり 静馬

はれきって介抱などとは思って たつみ

介抱が輸血までする破目となり 真砂
 介抱が中風の気ままであまし 一栄
 行届く嫁の看護へ気が折れる 清子
 介抱はほっととき遺産は当にされ 白溪子
 伴せは生んだ娘にみとられて 阿茶
 入院が夫の愛情見直させ 珠笑
 介抱をしりたりされたり養老院 一栄
 割前はいっしよで介抱役は下戸 阿茶
 介抱に好きな看護婦来てくれず 進之助
 意識回復はじめて病院だとわたり 進之助
 介抱の母をいたわるほどに癒え 静馬
 介抱する顔恋人に見えて来る 水京
 あきらめて二号に介抱させてやり 一栄
 酔うたふりして介抱の膝枕 進之助
 介抱のそれから恋とやらになり 恒明
 介抱の食欲病人けなるがり 文蝶
 肺炎の峠がみえた体温計 圭井堂
 急患へ着のみ着のまま夜を明し 幸雄
 介抱へ酔うた不覚を繰返えし 白溪子
 介抱をさせて不服な千鳥足 あきら
 介抱は俺に任せが先に酔い 瓢太
 介抱は俺に任せが先に酔い 幸雄
 お丈夫なおひとと介抱されながら 古方
 介抱へ痛をな顔をしてあまえ 滋雀
 介抱の礼録音にしときたい 美房
 介抱をさせて飼育をこころみる 文秋
 子の怪我へ母血圧を言うとれず 文秋
 席題「泣きどころ」土井文蝶選
 茫としてなかなかに泣きどころ 旅風
 泣きどころ知つる母に歯が立たず 白柳
 泣きどころついでにぐんぐんし上り 清人
 泣きどころのせかされていたガラス越し かつみ
 貴祿がちこうて笑える泣きどころ 白溪子

泣きどころあの手にこの手に見えす すすむ
 どうしても妻には勝てぬ泣きどころ 同
 演出も「やま場」の泣きどころ 六竜子
 泣きどころ知つるらしい素振り見せ 甫佑
 泣きどころ税吏きつちり見逃さず 進之助
 裏められて値引きさされる泣きどころ 天樹
 泣きどころ言うたりまひよかと強い腰 摩太郎
 泣きどころどうせあたしは田舎者 清人
 大物のこんなところに泣きどころ 甫佑
 小出しにする気ババの泣きどころ 水京
 飲み代を包うんで腰を上げ 水客
 学歴を問われるとつい弱くなり 瓢太
 泣きどころちゃん抑えている電話 旅風
 娘には目のない妻の泣きどころ 舟遊
 泣きどころ蔭の女に手古摺って 井平
 惚れている証掘にぎられ泣きどころ かつみ
 別宅を知る運ちゃんに気をつかい 静馬
 泣きどころ知って身近かな人になり 珠笑
 じんわりと睨まれている泣きどころ 玲人
 結局は金が夫婦の泣きどころ 文蝶
 席題「噂」 傍島静馬選
 うわさはとめてとりやせんのおとされ 恒明
 本人を見て井戸端の話題かく 句楽坊
 立話し噂の人を振り向かせ かつみ
 あの空家悪いうわさで建くされ 句楽坊
 一人娘子飼いを養子にする噂 井平
 母の愛悪いうわさもかばてくれ 恒明
 不渡りの噂は手形の廻る前 専翁
 末亡人噂の中でもまわてる 清子
 もみ消した噂が噂として流れ 庸佑
 重きもの噂のひとつ付きまとい 水客
 ちっとずつ交って噂伝えられ 古方
 お茶呑んだだけが噂のまことなり すみれ
 会うて見りや噂はどでもない男 専翁

そんなこと噂ですよと聞き流し 進之助
 噂にも儲け頭とは嬉しいな 恒明
 嘘嘘と夫の噂聞きながし あいき
 噂では苦労している家出の娘 舟遊
 近所でもナゾの女という噂 舟遊
 そそくさと噂の渦の中を抜け 玲人
 善行の噂案外広がらず 清子
 儲けてる噂へ故郷から寄附のこと 進之助
 ご近所の噂は二号にしてしまい 甫佑
 冗談が噂となって好きになり 花雄
 知らぬ間に噂の二人消えており すみれ
 お噂はなどと如才のない名刺 すすむ
 噂噂とうとう箱にしてしまい 瓢太
 噂立つうちは人気のある証掘 瓢太
 噂にもあがらぬ奴に先越され 美房
 末端で噂とことん大きななり 静馬
 席題「先約」 河相すすむ選
 先約の方をこたわるいいたり 古方
 先約の口はいつもの女文字 摩太郎
 現ナマに先約あつさり断られ 静馬
 今日こそ先約は先約ありますの 女
 先約を振って来たのとねだられる 珠笑
 先約がある秘書には手言わせ 美房
 先約があるのにパトロン顔を出し 花梢
 先約の取消し当にする電話 白溪子
 先約があつてのれんを二度くり かつみ
 インタビュ先約順が待ち切れず 天樹
 先約済と書いて買気を募らせる 静馬
 招待の先約らしい席が空き 白溪子
 遅刻して来て先約が前の席 いさむ
 先約に先約があり流行っ奴 六竜子
 先約と聞いて一層はしくなり 静馬
 目をつけた娘へ先約のある話 かつみ

先約を断わりますと喜ばせ 清子
 先約をコピーだけで逃げて来る 白柳
 約束を信じそのまま老けている 水客
 先約はコードモヤっぱり破るまい 古方
 先約はもう断る気馬が合います すすむ
 川 阿倍野支部句会 (大阪市)
 金井文秋報
 代役の台詞をとちる一夜漬 梅里
 一生は若気の傷がつきまとい 野菜
 一徹を通して余生淋しく居 一栄
 一徹な話が年を感じさせ 水客
 一代で築き上つて孤独なる 柳宏子
 一はいぐらゐえがと禁酒くらつかせ 静馬
 一夜漬テストがすめばみな忘れ 庸佑
 ふり返る一代内助のみ光り 恒明
 一人だけにしといてやれといわれ 生薑
 重役の癖一ぱいにストのピラ 圭井堂
 一夜漬まだ大根の味がする 清子
 老の 一徹余りにも弱く 八郎
 一生を賭けて借金だけ残し 好郎
 一ぱいの酒が女を強くさせ 洋敏
 嫁が来てからは変つた一夜漬 柳志
 一人来て二人で来たいよい景色 竹莊
 ボロ過ぎた話一ぱい喰わされた 専翁
 一徹の父にもあつた人間味 鉄児
 道楽はわし一代で勝手なり 多久志
 大喝一声後から女房に謝らせ 小松園
 一代で背負い切れぬ穴をあけ 水京
 二人して一人息子を持て余し 一舟
 子に若さ捧げた母の一代記 弥生
 一代が飲まず二代目飲みつがし 東天紅
 一人だけ信じてくれる手を握り 文秋

常連のアデに女将の一夜漬け 白柳
告げ口の一人好い子になるつもり 珠笑
PTAさあまたが一人いて座が白け 嘉代子
一人だけ反対してて置き去られ 瓢太
宴会で貰にはいった一夜漬 万里
同行は二人と笠に一人旅 又楽
一ぱいが招いた傷と見てくれず 藤間
部屋一杯ちらかし失物見つからず 宗義
千円札でワンマンカーを降される あいき
一夜漬なまの胡瓜を食べさされ 喜仙

川維 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

年玉の袋のままで買にくる 義介
ストープの部屋で宿題寝てしまふ 静馬
ストープの窓から木葉の乱舞見る 柳宏子
ストープの窓から木葉の乱舞見る 清子
ストープへあぶれが寄って社会観 六童子
繁昌を祈った帰り忘れもの 白柳
繁昌の店塵箱の嵩に見せ 小松園
新品のうちばていねいにブラシかけ 一栄
新品の値段で中古つかまされ 水京
値引きした新品逆に売れ残り 正彦
ためはよくないが新品へつけくわえ 天真
相談はすぐに纏まる飲み仲間 市郎
へそくりを見せあう程の仲のよき 城東
仲よしやないのと秘密聞きながら 文秋
仲よしの友の帽子を墓標に着せ 半月
肩叩きあうても恋にはならぬ年 風仙洞
友はよしとえ阿呆と云われても 井平
初仕事カンナを研いで大工去に 句念坊
初仕事今年もどうやらいいそうだ 八郎
故里の匂いのままで初出社 あいき

書類まだ社長へ来ない初仕事 眉水
初仕事机の上が広く見え 生薑
ストープの見張りのように猫がいる 珠笑

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

蓄めよとの謎か財布のプレゼント 柳葉
新鮮味あるにアブレで葬られ 晚舟
味出さぬも出しがらの我身なり 細香
禁酒して初恋に似た酒の味 内海
味の素少々、カロー、ビタミン割烹着 峯圓
花作り二世は儲け父は趣味 蒼陀楼
政治熱倒産しても忘れられず 平八郎
新婚に夫へ味見させたがり カロ女
味覚よき豚の石焼オコレハ あき坊
空財布枕にゴロリ二日酔 এস子
失った財布 鑑札だけ戻り 紅溪
婦唱夫随財も美事牛耳られ 快夢起
特売へ財布の口はあけたまま 万里歩
たたまたた福祥の上に財布置き 雪女
気焔吐きとうとう財布空になり 静杉
清貧に耐える財布も古くなり 静紀
食べるのは財布が別な共稼ぎ 北海
二次会のシグナル財布気にかかり 浅太
師走風財布の中も寒うなり 平八郎

川維 京都支部句会 (京都市)

田中烏雀報

空があるので春の鳥秋の雲 紫蘭
海と空ひつついて地平線と云う 美佐緒
春の空男くさきをそばに置き 司郎
火葬場の煙突から大空へ消える 説次
婦人科で笑えぬことの早合点 尚平

早合点もう血相を変へている 生薑
嫁ちが公平すぎる意地と意地 和三郎
悲しい嫁ちとなる家庭裁判所 磯
ドライブに米るとはよもお伊勢さん 烏雀

川維 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄報

長尻の客へ灯りを一つ消し 鉛ん坊
長い尻片言がきて腰をあげ 三平
長尻へ猫もあくびをして出かけ 宗義
長尻の話始めに又戻り 鮫虎狼
言い忘れましたと長尻また帰り 秋月
長尻へけちな男が炭をつぎ 賤女
長尻が煙草の封を切っており 照路
冷えた茶を長尻おいしうに飲み 胡風
長尻が帰るへ妻ははは笑まず 紫峰
長尻が早く帰れば気にかかり 柳五郎
長尻をして後家さんに誤解され 幽谷
長尻の留守へ長尻待つて居り 三六
長尻に何の苦勞もない素振り 佐加恵
長尻が晩の献立で狂わせる 哲郎
長尻の話の種を不思議がり 久米雄

川維 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平報

暖かし妻に引かるる老の身は 六角
母一人娘一人巡査を下宿させ 光郎
子のため母地下足袋を今日もはき 魯木
母さんも軽くサベつて子もすべり 味平
肩書に人間国宝と刷ってなし 酔羊
名刺には何とか箔をつけたがり 雅城
能無しと見てか名刺もとう呉れず 一路
凡骨の年令だに肩書多い事 久雄

川維 出雲支部句会 (出雲市)

尼緑之助報

信仰の石段祖母と手をつなぎ 独仙
温室の四季へ生活ついで来ず 明朗
十代の無口な息子も足らず 可明
ふるえる肩に怒りがまだ残り 晃男
学校の温室採算考え 章峯
蒲鉾を犬にも喰わす目出たい日 舞吉
これほどの人気を河馬が不思議がり 重信
子の微笑嬉しい夢を見てるらし 祥月
温室の苗は一と足先に出る 松風
肩抱いてここに孤独の骨を知る みどり
すたれない人気表紙で笑いかけ 岬月
母の肩もんで故郷の日向ほこ 李明
筆不精一筆頼む墨をすり 芳正
おめでたい蒲鉾しばし噛みしめる おさむ
かまはこの色鮮かに披露宴 春軒
十代の親を呼び出す裁判所 正治
十代で一生食える荒稼ぎ 紅葉
十代の頃の無謀がまだ残り 健太郎
我が家で満五カ月の子が人気 雅行
温室に明日の出荷を待っている 幽鳥
妥協せぬつもりが肩の手を払い 代仕男
頂上を意識一步一步の呼吸 緑之助
十代の恋は真紅に咲いただけ 壮

川維 大鉄支部句会 (大阪市)

辻白溪子報

鳩にやる米だけ持って乳母車 求女
舟世帯かてきの火をおこす風 水客
冗談して本心を掴まれる たつみ
ブレーキももう大阪に近い音 白虎

二次会へブレーキ役もついて行き 一
ブレーキを掛けて車は怒鳴り 合 叩 門 香
工事場のたき火もつたにや 焚かれ 明 憲
今日も無事豆粒ほどの火が残り 加 泉
火の消えたような静かき娘が嫁ぎ 永 断
いか釣の灯は遠く村静か 勇
残り火でするめ焼いてる父の酔い 季 賛
療養の長さへ鳥まで持込まれ 白 溪 子
エンジンブレーキ海まで続く急カーブ 万 的
ひと掴みしてお遍路の喜捨とする 勢 火
新芽食う雀と知って憎まれず 杜 的

維 備前支部句会 (岡山県)

横山 一声報

別室の酌はその気になって受け 浄 美
別室は名刺を持ったのを通し 秋 月
別室へ心得顔で案内し 水 仙
別室へ移し病人気がほそり 良 江
別室へ主治医が呼んだ不安な日 伊 久 野
別室で札束見せて交渉し 美 枝 子
辞書買うと言えばだまされる親だった のぶ子
先生もやっぱ辞書を見て教え 一 声
一枚のハガキへ辞書がまたひかれ 久 米 雄
母の書く手紙は娘が辞書になり 真 奇
宿題へ母もこっそり辞書をひく 胡 風
また一年辞書をたよりに浪人し 計
辞書にない言葉で若い娘が話し 静 子
口髭が濃くなり親の意にそわず あやめ
口髭のところで剃刀とりかえる 宗 義
元且へ古い口髭そり落し 東 岸
口髭を見せて叔父貴のぐちとなり 幸 仙
ラーメンの湯気に口髭光ってる 千 秋

維 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

祝儀へもうひとさしの舞扇 武 司
好きな娘が居て祝儀もはずんどき 柏 子
着替する帯から祝儀袋落ち 勝 子
祝儀の高も両家が打ち合せ 窓 花
祝儀が目当ての婿には知りながら 遊 子
猿廻し祝儀の札は猿にさせ 博 理
祝儀の出さうな門でシシは舞い 武 司
歩くことにも和服気をつかい 松 竜
五カ月の腹を和服でまだかくし 勝 喜
奥様の和服姿にある魅力 吞 洋
療養の夢に振袖着てみたい 天 花
母に似て和服が似合う娘に育ち 寛
子の力父を追ひ抜き餅をつき 小 雀
正月が降りまで来た杵の音 俊 一 郎
朝刊で昨夜の祝儀をホシと知り 夢 生
やけ酒に近い日もあり十二月 蟻 蛇
十二月ほろい話え気をとられ 松 風
終着の年始は飲める家にする 紅 雨

杏林川柳会 (大阪市)

中島生々庵報

お帰りが今夜もおそい夜長なり 生々庵
要人狙撃好奇心では済まされず 一 哲
好奇心尾をひっぱってかみつかれ 野 迷 路
好奇心今度は枸杞を飲みはじめ 阿 茶

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻 圭水報

ごて得を妻もちよい手に使ひ 句念坊

どんぐり川柳会 (羽曳野市)

古川静波報

窓をのぞく日を明日の希望に除夜の鐘 とし枝
賽銭を投げて望が大きすぎ 六 双
子へ希望託して今日も土に生き 元 金
親と子が違う希望の発車ベル 凡 子
晴着着てうちの畳の汚なすぎ 静 波
無視し合う晴着と晴着がすれ違い のぼる
ふだん着でよかつたのかと来て思い 五 郎
子に晴着ホット安堵の寝正月 ひろし

富柳会句会 (富田林市)

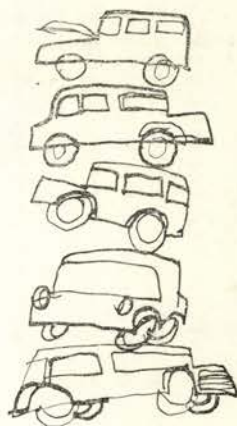
阿部柳太報

将を射ん無理をしましたお年玉 美 代
年玉にうすいボーナス空になり まさる
お年玉得っておるのに孫スキー 菊 代
お年玉他人の前で開けられる 太 治 郎
お年玉末っ娘の婿のはずみよう 八 郎
末っ子がいつかめつのお年玉 きはち
お年玉せびる孫らにからまれる 青 米
年玉のない子もある言ひ聞かせ 美 房
お年玉働きたる父憎む 六 竜 子
子沢山もうお年玉あてにする 紅 月

あすなる川柳会 (大阪市)

山本素郎報

何事もなかったような老夫婦 一 杵
喰べすぎて薬も咽喉を通らない 志 郎
ほろ酔いの夫に賽銭だけわたし 信 重
さくら炭はじいて辰の景気よさ 武 男
消すよりも走るに困る消防車 慶之助
まさことのいもあの子ら夫婦夜 恵 美 子
飄々と浮かれて今日の風が吹き 百 酒
ほろ酔えば天下国家をとる気概 幸 児
喰べすぎのお腹をママに見せにくる 尤 三
赤ちゃんのとおりママも百面相 福 郎
黎明の鐘が平和な村に鳴り ゆきを
ほろ酔いのママが泣き上戸 素 郎
一ぱいが出るへ萬障繰合せ 梅 里



4000.

柳樽室

路郎生

★グングン春めいて来た。あちこちより梅だよりがある。やがて桜もはこぼりそめるであろう。

健康を害し又々ズレてしまった。恐縮の外なし、今しばらくご辛抱をお願いする。

★毎号好評はうれしいが、私の健康状態がおもしろくないので前号も発行日がズレて恐縮している。編集方面に経験を持たれた方ならご想像はつくと思う

★読物は例によって豊富である。大いに味読していただきたい。近頃はテレビなどの影響で、一般に思考力が減退しているようである

★私の健康状態を心配され各地の諸君から多数見舞の通信をいただいたが、一々答礼も出

★一昨年、川上三太郎君が重患で入院したので、見舞に行ったが、幸い事なくすんだのでよるこんでいる。距離的に離れていると、どうかしらと案じるものである。熊本の田中辰二氏の健康状態がおも

来ぬ状態なので失礼はおゆるし願いたい。今すぐどうということはあるまいと思うので、ご放念下さい。私より若くて元気な岐阜の今井鴨平君のようなこともあるので、万一のことがあっても、それは仕方のないことだと思っている。近頃新聞の計報を見ていると私より若い方が多いが、やはり激務から死を早める方も多いのではないかと思っている。私に今、最も必要なのは静養だと思いが、それが思うように出来ないのも宿命でしょう。

★昨秋は浜田久米雄君の句集を弊社から出したが、今年はハワイの古川風竹、高沢一浪、内藤草一郎の三人句集を出す予定をしている。既に原稿は手許にあるが、太平洋戦争当時のものを今少し補充したので、今しばらく待っていただきたい。三君とも今は故人であるが、海外に於ける名作家として推奨し得る作品集である。

★本誌の「川柳柳初篇研究」の補導を煩わしている岡田甫氏が主宰されている「近世庶民文化」は古川柳を研究されていられる方には参考になると思うのでおすすめする。既に八七号が出ている。会員組織で非売品であるから東京都新宿区戸塚町一ノ四八近世庶民文化研究所、岡田甫氏宛に申し込またい。

★次号から内容や発表方法について、少し改めたいと思っている。どう変えてゆくかは目下研究中であるからハッキリしたことはいえないが、若手の進出を目指して行くことだけはいつておいてもよい。その意味からも次代を担う若い人たちのハッパンをのぞんでやまない。

川柳支部句会
三月
☆かがみ句会・2日(月) 一時、題、乱れる・安定・弱気・くずれる・断引、所、池田古心居。
☆明和研究会・8日(日) 一時、題、芸・卒業・幕、所、阪新鳴
☆南海電鉄句会19日(木) 六時、題、歩道・試験・ゆとり、所、難波高架下親和クラ
☆京都句会・16日(月) 夕、題、静か・若い・むせびなき・所、四糸縄手仲源寺。
☆阿倍野句会・20日(金) 六時半、題、三振・三役・三面・三月、所、阿倍野区松崎町3ノ10 割烹大萬。

オリンピック東京大会記念メダルが当る!



フレッシュマン ＊ セール

2月1日→4月20日



14金ペン付 ¥800から

ペンロッド

東野大八著

風流 人間横丁

B 6型 二五八頁

価 250円
送費70円

★異常な戦争にまき込まれ隻手となつて帰還した著者のザックバランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄い。まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。
★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の踊らぬ読物としてお薦めしたい。

高鷲亜鈍著

詩川柳考

B 6型 函入 定価三百八十円 送費九〇円

★著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であつたがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した。今は柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す。ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る。凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書

若本多久志著 麻生路郎序

川柳 親ごころ子心

価 150円
送費50円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾ひ蒐めたのが本書である。
登載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知ることの出来る実に有意義な書である。

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

発行所 大阪市住吉局区内
万代西5丁目25

川柳雑誌社

振替口座大阪75050
電話 大阪 6081

C・M・C 児童音楽サークル

バイオリン・ピアノ・声楽・チェロ・特設バレエ科

千林教室

大阪市旭区北清水町九六

北清水集会所 バイオリン科

あびこ教室

大阪市住吉区南住吉四ノ一

あびこ幼稚園 バイオリン科 電話1874

布施教室

布施市荒川一丁目

第一公民館 バイオリン科

生駒教室

奈良県生駒町北新町

文化会館

生駒2027

指導

麻生アート 外教氏

★サークルに関するお問い合わせは左記へお願いいたします

奈良県生駒町本町103 電話生駒(〇四三七)二〇二七

主宰 麻生アート

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

深入り (十句以内)
うたた寝 (十句以内)
忘れる (十句以内)

曲り角 (十句以内)
混浴 (十句以内)
忘れ (十句以内)

近作柳樽 (毎月廿句以内)
川柳塔 (毎月十句以内)

文 章 (評論・研究・感想其他)
投稿規定 (毎月十五日締切)

▼▼▼
投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
「課題吟」は誰でも投句が出来る。
「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

B 列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 第三十九号
定価 一二〇円 (送料六円)

(禁転載)
半カ年 七五六円
一カ年 一四四〇円

昭和三十九年二月廿五日印刷
昭和三十九年三月一日発行

大阪住吉局区内万代西五丁目二五番地
行店別人 麻生幸二郎

発行所 川柳雑誌社

電話大阪(671)六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿九年三月一日発行
(毎月一回一日発行)

編集人
発行所

麻生幸二郎 発行所

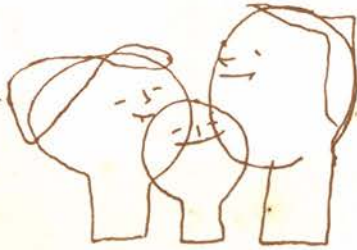
川柳雑誌社

大阪市住吉区西成五丁目二五番地 電話大阪671六〇八一

振替口座大阪七五〇五〇番

正価百二十円(送料六円)

一家そろつてホーライ党



廣東料理 豚饅 焼売



大阪なんば・TEL (44) 551-2

プラス
+保温式



サンヨー

ホットママ

EC-22型

現金 43,00円
正価

SANYO

三洋電機株式会社

麻生路郎先生著

川柳とは何か

—川柳の作り方と味わい方—

価 二五〇円
送 七〇円
費

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507

みさき大つつじ人形

風雲戦国史 豪華見流し25場面

3月20日～5月31日

入場料 大人 150円

小人 80円

第1会場 みさき公園

第2会場 たんのわ遊園

南海電車

